寧金抗沙峰

ＨＡＪニンチンカンサ登山隊　1997年

登山報告書

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

寧金抗沙峰

ＨＡＪニンチンカンサ登山隊　1997年
登山報告書

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

▲ニンチンカンサ峰西面、左奥が主峰

▼三角岩上部の登攀

▲三角岩への取付き

▲三角岩～Ｃ２の稜線

▲南方6,674ｍ峰

▲南方6,325ｍ峰

▲Ｃ２から見るニンチンカンサ峰（○印がＣ３）

▲南方、ブータン国境の山々

▲カロ・ラから見るカロ氷河

▲ベースキャンプ（4,850ｍ）

▲ＢＣ～Ｃ１間のガレ場

▲Ｃ１（5,800ｍ）

▲Ｃ２（6,400ｍ）

▲登頂を終えてＣ３へ戻った１次隊

目　次

はじめに ……天城　敞彦　1
登山の概要 ……　2
第1部　行動記録 ―――――――――――――――――――――――― 3
往路キャラバン ……森　　達弥　4
登山活動 ……天城敞彦、志小田美弘　5
帰路キャラバン ……鮫川　太一　13
第1次隊登頂記 ……森山　安次　15
第2次隊登頂記 ……野口　道雄　17

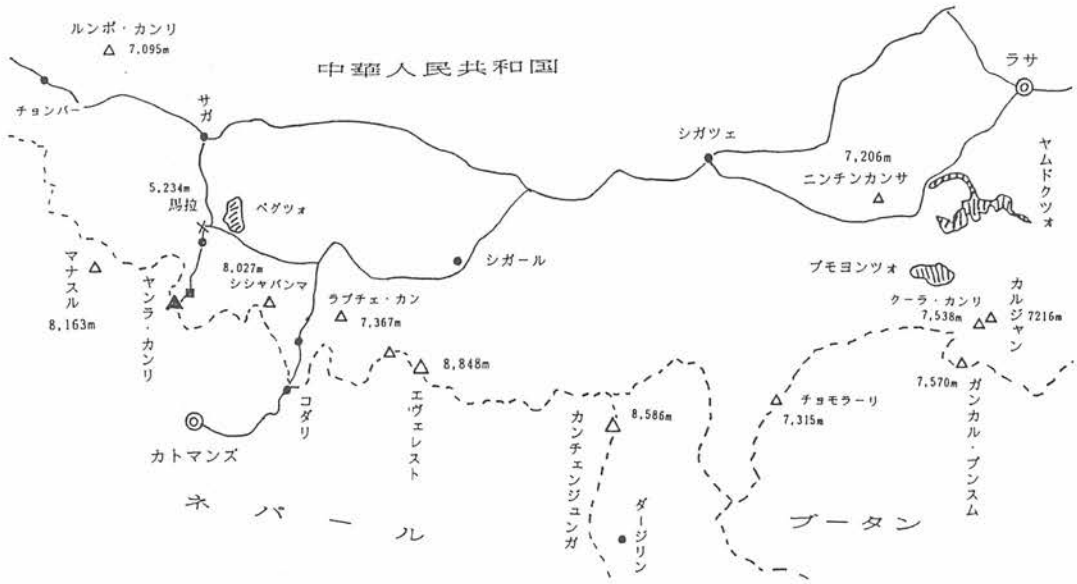
第2部　隊務報告 ―――――――――――――――――――――――― 19
タクティクス ……志小田美弘　20
食　　糧 ……川崎　浩史　22
行 動 食 ……鮫川　太一　23
装　　備 ……高橋　敏雄　24
輸送・梱包 ……森山　安次　30
通　　信 ……脇田　康治　30
医　　療 ……石川　龍彦　31
環　　境 ……加藤　和美　34

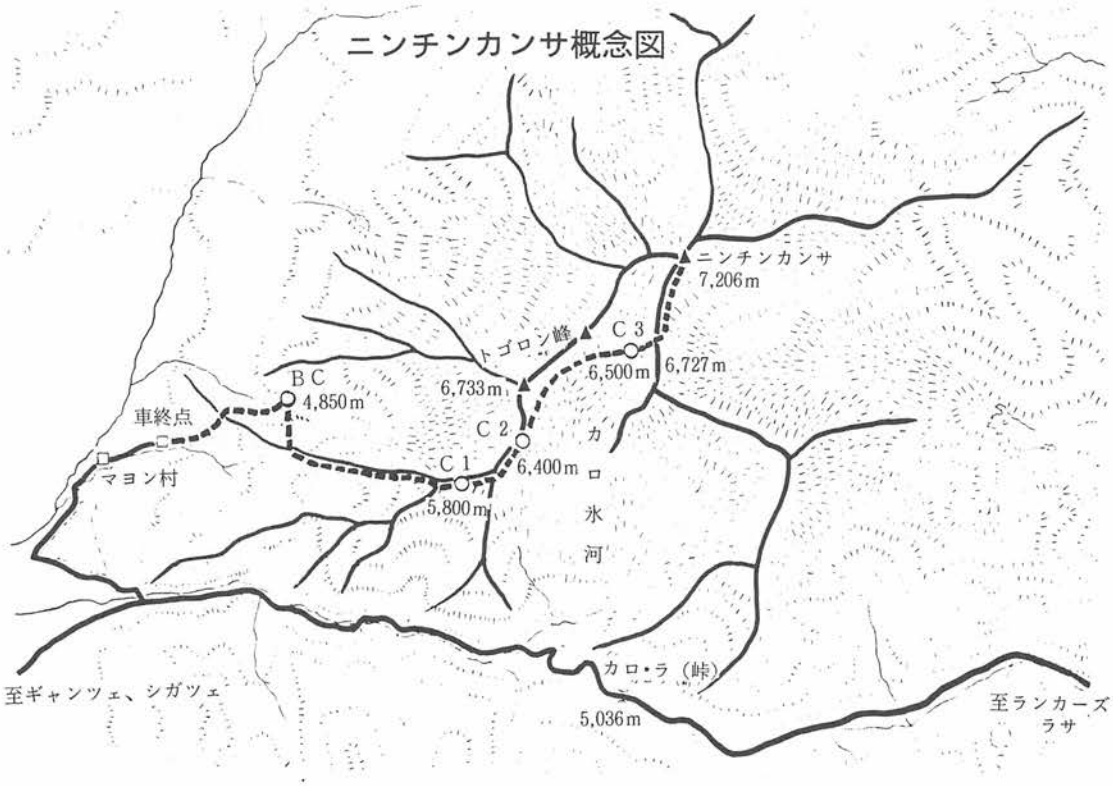
第3部　隊員紹介・紀行 ―――――――――――――――――――― 35
隊員紹介 ……天城敞彦、志小田美弘　36
遠征を終えて ……天城　敞彦　44
11年ぶりのチベット ……志小田美弘　45
楽しかったＢＣの生活 ……野口　道雄　45
ラサへの４往復と高所順応 ……飛田　和夫　46
登山を終えて ……森山　安次　49
途中下山、１人帰国の旅 ……脇田　康治　50
ヒマラヤへのハードル ……鮫川　太一　51
ニンチンカンサ登山隊に参加して ……加藤　和美　51
雑　　感 ……高橋　敏雄　52
1997年　１年を振り返る ……川崎　浩史　52
ニンチンカンサから帰って ……森　　達弥　54
走向山野 ……趙　　玲玲　55
（対訳） ……吉田　隆司　58

ニンチンカンサ登山小史 ……　60
御協力者名簿 ……　62

題字・大橋蒼馨

ニンチンカンサ位置概念図





はじめに

天城　敞彦

日本ヒマラヤ協会は、サマーキャンプと銘打ってこれまで会員の要望に応えて休暇の取りやすい夏の期間に、比較的天候に恵まれそうで短期間の登山が可能なヒマラヤの高峰で登山活動を行ってきた。それはインドのガルワール、カシミール、中国の新疆ウイグル自治区であって、それぞれ大きな成果を収めてきた。

そして今回初めて岳人のあこがれの地チベットにフィールドを求め、ニンチンカンサ峰がその対象に選ばれた。

ニンチンカンサ峰は、チベット自治区の首都ラサの南西方約115㎞の地点にあり、アプローチは短いが、堂々たる氷河を従えた立派な7,000ｍ峰である。

この山に登るため北は宮城県、西は広島県から14人の仲間が集まったのは1997年の１月のことであった。準備の段階で副隊長を予定していた１名が家庭の事情で不参加となったが、ともかく13名が力を合わせて計画を練り上げ、準備活動を終え、そして全力で登山を行ってきた。

登山活動は必ずしも順調ではなく、悪天に悩まされ、また、何人もの病人が出て５回もラサに下るということもあった。

しかし何とか困難を乗り越え、登山期間も押し詰まった８月17日と18日の２日間に９名が山頂を踏むことができた。当初目標に掲げていた全員登頂はならず、また２桁の登頂も果たせなかったが、ともかく事故もなく登山を終えることができたのだから、成功といってよいであろう。

登山を終え帰国した隊員たちはまたもとの忙しい日常へ戻っていったことであろうが、夏の39日間、苦楽をともにしつつ大自然に抱かれていた思い出は、きっと心のどこかで己を支える力となっていることだろうと思う。

この登山を支えてくださった、ＨＡＪ事務局、中国登山協会、チベット登山協会、その他多くの方々、そして隊員の家族の方々に御礼を申し上げつつ、われわれの登山の記録を報告したい。

登山の概要

1　目標の山

中華人民共和国、西蔵自治区ニンチンカンサ峰（7,206m）

2　登山期間　7月20日～8月27日（39日間）

3　登山の目的

①西面からのニンチンカンサ峰の登頂

②山岳登山環境の保全（テイクイン・テイクアウトの実施）

③中国と日本の友好親善交流

4　結　　果

①8月17日6名、18日3名が登頂した。

②隊で持ち込んだものは回収しラサまで持ち帰った。ゴミは焼却した。ただし残念ながらフィックスロープとスノーバー、竹竿は残置した。

③友好に務めた。北京では中国登山協会に対して答礼の宴を持った（ＨＡＪ主催）。

5　隊の構成

隊　長	天城　敞彦	東京	50歳
登攀隊長	志小田美弘	宮城	38歳
隊　員	野口　道雄	千葉	60歳
〃	飛田　和夫	埼玉	51歳
〃	森山　安次	東京	47歳
〃	脇田　康治	広島	46歳
〃	鮫川　太一	茨城	46歳
〃	石川　龍彦	兵庫	45歳
〃	加藤　和美	愛知	44歳
〃	滝田　　収	福島	40歳
〃	高橋　敏雄	宮城	38歳
〃	川崎　浩史	埼玉	33歳
〃	森　　達弥	福島	26歳
連絡官	趙　　玲玲	北京	40歳
通　訳	張　　少宏	四川省	28歳
コック	黄　　彦	四川省	28歳

6　推進の組織

日本ヒマラヤ協会ニンチンカンサ峰登山隊実行委員会

会　　長：稲田　定重
（ＨＡＪ理事長）

委　員　長：山森　欣一
（　同　専務理事）

副実行委員長：天城　敞彦
（　同　登山隊隊長）

実行委員：八木原圀明
（ＨＡＪ常務理事）

〃　　：寺沢　玲子（　同　）

〃　　：中川　　裕（　同　）

〃　　：登山隊員

日　程

7月20日　登山隊13名、成田発、北京（泊）

21日　北京発、成都（泊）

22日　成都発、ラサ（泊）

23日　ラサにて買出し、梱包

24日　高所順応訓練（4,100mまで）

25日　ラサ発、ランカーズ（ヤムドク湖畔、4,400m）（泊）

26日　高所順応訓練（5,000mまで）

28日　ＢＣ（4,850m）建設

31日　Ｃ１（5,800m）建設

8月11日　Ｃ２（6,400m）建設

12日　アタック体制完了

16日　Ｃ３（6,500m）建設

17日　１次隊６名登頂（12:48～13:40）

18日　２次隊３名登頂（13:50）

19日　登山活動終了

22日　ＢＣ撤収、ラサ（泊）

25日　ラサ発、成都（泊）

26日　成都発、北京（泊）

27日　帰国、成田にて登山隊解散

第１部　行動記録

往路キャラバン
登山活動
帰路キャラバン
第１次隊登頂記
第２次隊登頂記

ヤムドク湖とニンチンカンサ峰

往路キャラバン――不安と期待の状態でチベット高原へ

森　達弥

今年の１月から数回のミーティングを重ね、安達太良山と北アルプスの白馬岳での飲み会？（合宿）を終了し、それぞれの隊員が待ちわびていた出発日がやってきた。前日の７月18日の晩より、東京に集結した。ＨＡＪルームで打ち合わせをして、その後少量のお酒で喉を潤し、翌日の出発を待った。これまで、それぞれが各々に抱いていた憧れのチベットに対する思いがつのっていたためか、実においしいお酒を飲むことができた。それから志小田登攀隊長、石川隊員、高橋隊員と私でしばらく味わえそうもない日本の味を求めて、夜の東池袋を徘徊した。結局お寿司屋さんで落ち着いた。そこで、日本製のビールとお寿司をいただいた。お酒が回っていたので、いまいち味がわからない。きっと、おいしかったのだろう。その晩、隊員たちは天城隊長宅とＨＡＪルームとに分散して泊まった。ＨＡＪルームでは、みんなで雑魚寝した。

７月20日　雑魚寝から目覚めるとまずまずの天気であった。軽く朝食をすませ、集合時間を待った。10時10分にＨＡＪルームをあとにして、東池袋駅へ向かった。一緒に寺沢さん、天城隊長の奥さんも同行していただけた。山森専務理事もラサまで一緒であった。11時ごろ地下鉄を乗り継いで箱崎シティエアーターミナルに到着した。そこで野口さんと合流して、11時30分に荷物のチェックを終了後、リムジンバスに乗りこんだ。眠りについたためか、あっという間であった。成田の第２ターミナルに到着後、軽く食事をとって、ゲートが開くのを今か今かと待った。14時45分にやっと開いた。定刻より、やや遅れて15時18分一路北京へ向けて離陸した。機内では、ビールを飲んでいる者、寝入っている者とそれぞれの過ごし方をしていた。北京に17時13分に着陸した（中国時間）。手続きや荷物を取り出すのに、だいたい30分かかった。迎えには、今回の連絡官の趙さんをはじめ中国登山協会の方々に来ていただいた。空港よりバスに乗り、市内の食堂に行き、夕食をとった。大きな円卓２つに、中国登山協会の方々とわれわれの約20名が食事の席についた。食事前に山森専務理事より挨拶があり、お土産が贈られた。そして中国製のビールで乾杯が行われた。料理が次からつぎへと出てくる。その量の多さにまず驚いた。当然のことながら出てくる物すべてが非常に油っぽい中華料理であった。翌日（７月21日）の飛行機が朝早いので、ホテル（北京前門飯店）で早々に寝ることにした。

７月21日　６時30分にホテルのロビーに集合して、弁当をもって、バスで空港へ向かった。空港で手続き済ませて、弁当を食べた。弁当の中身はサンドイッチ、もものジュース、ゆで卵、チョコレートなどが入っていた。飛行機が離陸したのは、９時08分であった。機内でも朝食がでた。弁当を食べてまもないために、とてもたべられる状態ではなかった。成都に到着したのは、11時を少し回っていた。荷物を確保した後、手続きを済ませて戸外へ出ると、とても暑い。迎えは、今回の通訳の張さんと四川省登山協会の方々が見えていた。昼食のためそのまま、２台のバンに分乗して町にでた。北京でもそうであったが、建設ラッシュである。この国の力強さを肌で感じながら、レストランに向かった。博物館の敷地にあるレストランで食事をとった。この国では、ビールが冷えているという状態が珍しいらしい。やはり豪華な中華料理の洗礼を受けた。その後、今夜泊まる西蔵飯店へ行き、夕食まで、フリーとなった。私はシャワーを浴びて、部屋でくつろいですごした。夕食は皆の希望？で陳麻婆に行き、麻婆豆腐を食べた。正直言ってこんなものか。連日の中華料理とさして変わらないように思えた。しかしとても辛い料理が多い。

７月22日　今朝も飛行機の時間のため、早起きした。日本でこんなに早く起きたら、そのあと眠たくてしかたないが、ヒマラヤの高峰に登るとい

う大きな夢のために我慢できてしまう自分に納得。ホテルを5時15分に出発した。空港内にはこんなに早朝なのに大勢の人々がいた。飛行機の窓より地球のシワが見られた。この大陸の大きさを思いしらされた。ミニヤ・コンカ、ナムチャ・バルワ等の山々が見られた。ラサへは1時間35分で着いた。午前中は高所順応のため体を休めた。午後は隊長らと市内観光で八角街などを見物した。ホテル（銀橋飯店）の階段の上り下りがとても辛い。

7月23日　ホテル内のレストランで朝食を済ませ、西蔵登山協会へ向かう。テントを張り、先に送っておいた荷物の梱包を解き、チェックして再梱包をした。食糧の買い出しも同時におこなわれ、野菜、果物、米、卵などを買い込んできた。14時にだいたい作業が終了した。

7月24日　昨夜の夕食が原因か、夜中から下痢であった。7時に起床し、8時30分マイクロバスに乗って、ラサの郊外にある山（4,070m）の麓（3,665m）まで行く。ゆっくりと登りはじめた。9時15分に3,930m付近で休憩をとり、4,070mのピークに到着したのは9時40分であった。

さらにもう少し奥へ進んでみた。最終的に4,090mまで登って高所順応が終わった。11時45分、予定よりかなり早く下山した。

7月25日　8時55分に4台のジープとトラック1台に分乗してランカーズへ向かって出発した。途中カンパ・ラから真っ青なヤムドク湖を眺めながら、ところどころ菜の花の黄色が印象的であった。ランカーズの招待所に到着したのが15時近くになっていた。

7月26日　朝食後近くの山にジープで連れていってもらった。石川隊員、鮫川隊員は体調不調のため招待所で休息をとって、志小田登攀隊長、飛田隊員、趙連絡官はＢＣ予定地を下調べにいった。ゆっくりとさらにゆっくりと山登りをしていたが、やはり4,500m以上になると息苦しくなり、足も思うように動かない。他の隊員がかなり先まで行ってしまって見えなくなった。一番若いのに体力がない。結局他の隊員は5,170m地点まで行き、私はと言うと4,900m地点までしか行けなかった。再び他の隊員らとゆっくり下山した。滝田隊員と野口隊員は近くの山を縦走して下山した。夜間、趙連絡官が肺水腫らしい症状を訴えたため、すぐにラサにある病院へジープで搬送された。

7月27日　昨夜から石川隊員がかなり酷い咳をしていたため、飛田隊員の付き添いでラサの病院に行くことになった（不在中の医療担当を野口さんにお願いする）。昨日高所順応した隊員はお休みとなった。志小田登攀隊長と鮫川隊員が近くの山へ高所順応に行った。昼食は久しぶりに焼きそばを作って、食べた。食べていたところに志小田登攀隊長から無線連絡が入り、鮫川隊員とはぐれたといった内容だった。急遽、捜索隊が作られ、山へ向かった。天城隊長、川崎隊員、高橋隊員、滝田隊員が捜索隊となり、無線の中継に脇田隊員があたった。15時頃、鮫川隊員のみが帰ってきた。15時45分の交信で皆、下山した。遭難騒ぎは終わった。その夜のミーティングで単独行動の禁止ということが話された。夕食後、飛田隊員が帰ってきた。

登山活動

天城敞彦、志小田美弘

ＢＣ設営

7月28日（曇り夕方一時雨）　ランカーズ→ＢＣ

朝、鮫川隊員の熱が下がらず、このままの状態でのＢＣ入りは無理と思われるため、相談のうえラサに下ることにする。昨夜ラサから戻ったばかりの飛田さんに再度同行をお願いする。

10時出発。谷間の道を高度を上げるとやがて氷河を従えた立派な姿の山も見えてくる。小1時間で標高5,000mのカロ・ラに到着。目の前にニンチンカンサから落ちてくる氷河の舌端が見えるが、上部はガスの中。公路をしばらく西に走りニンチンカンサ西稜の末端を回り込むように公路から離

れ、10分ほどでマヨン村という名の小さな集落につく。このすぐ先にヤクが集結してくる。

21頭の予定だったがヤクがあまり大きくなく、またヤク工も登山隊の荷を運ぶことになれていないためか一度では運びきれずに2往復することになった（後に2倍の料金を請求された）。

ここからＢＣまでは1時間余りの行程。先発を志小田、川崎両隊員にお願いし、逐次出発。ラストの森山隊員と私がＢＣに着いたときにはトイレ用の穴も掘られおおかたの設営はできており、中国製の大きなメステントを張り終えると今日の作業はほぼ終わり。ここは栃木隊のＡＢＣにあたり、ニンチンカンサの西面を見上げる気持ちの良い草原上で、すぐそばには懸垂氷河から流れ出る清流が流れ、ゴンパ（小さなラマ教の寺）もある。マヨン村の住民にとっては鎮守の森というところだろう。この庭先をお借りする形である。

ベース開きを行う予定が雨が降ってきたため延期。隊員は8人用の大きなテントに4、5人ずつ入るのだから居住空間も広く快適である。23時頃、鮫川隊員を送っていった飛田さんが戻ってきた。本当にご苦労さまでした。

7月29日（曇り後晴れ）　ＢＣ整理

分担して隊荷の整理等を行うが私は絶不調。下痢、嘔吐、発熱でふらふらしていてほとんど作業に加われなかった。ひと段落したところで昨日延期したベース開きの儀式を行うがかなり手を抜いたものとなった。この後不調者が続出したのはこの手抜きのせいかもしれない。

登山活動

7月30日（晴れ）　5,300ｍまでの順化行動

この日から本格的な登山活動である。私は野口薬局の処方が効いて体調も戻る。9時20分発。全員で順化行動に向かう。西稜下部に向かってルンゼ状のところを登り、コルからはガレた斜面を急登する。千枚岩状のため落石はなく見た目よりは歩きやすいがやはりしんどい。ガレ場を登り切った小さなピークで今日の行動を終え、ここを登山靴等のデポ地点とする。昼過ぎにはＢＣへ。午後は自由時間。

志小田登攀隊長と明日以降の行動の打ち合わせをしパーティー編成を行う。Ａ：志小田、飛田、滝田、Ｂ：高橋、森山、加藤、川崎、Ｃ：天城、野口、脇田、森。

7月31日（晴れ）　Ａ隊（志小田、飛田、川崎）：ＢＣ→Ｃ１荷上げ

ＢＣではこの時期7時少し前から空が白み始める。テントを這い出るとＣ２予定地近くのピークの上に淡い三日月が出ている。天気は上々であろうと思われる。

お粥と海苔の佃煮の朝食を食べ、Ａ隊は8時にＢＣを出発する。ブルーポピーが点在する草地からガレ場の急登となり、40分程で高度5,120ｍの鞍部に到着する。まだ順化が十分ではないため、足は重く、呼吸は乱れ、荷が重く感じられてしょうがない。さらに面白くもおかしくもない、単純なガレ場の急登に1時間程耐えて、9時40分、昨日のデポ地点に到着した。

小休止の後、出発の時点になって、滝田さんが不調であることを理由にＡ隊からの離脱を申し出てきた。数度の遠征経験者である本人の自己の現状認識を尊重し、追いついてきていたＢ隊の川崎君と入れ替えることにし、11時の定時交信でＣ隊の天城隊長に説明し、事後承諾を得た。

ガレの稜線上での上り下りを繰り返し、12時頃に5,700ｍの雪線に到着した。アイゼンを付け、すね位の深さの斜面を疲労困憊の状態で登り、三角岩に続く稜線からやや中尼公路側（南側）に下った高度5,800ｍのＣ１予定地に13時に到着した。歴戦の勇者飛田さんと国内で初期順応の為に富士山に7回登ってきたという川崎君はさすがに強く、30分も前に到着。

定時交信の後、下降を開始。14時過ぎに5,700ｍの雪線で、登ってくるＢ隊Ｃ隊（高橋、加藤、天城、野口、森）と出会う。15時に荷物を途中デポして下降する森山さん、脇田さん、滝田さんと合流してＢＣへと下る。滝田さんの体調の悪さが見て取れる。

志小田、飛田は5,360ｍのデポ地点で、Ｃ１下の雪田をＢ隊Ｃ隊が無事に下るの確認してからＢＣに下る。ＢＣ着16時20分。ＢＣにはさっきつぶしたばかりの羊が届いており、新鮮な焼き肉、塩ゆでのスペアリブに舌鼓をうつ。

B、C隊（天城、野口、森山、脇田、加藤、川崎、森）：ＢＣ→Ｃ１の荷上げ

Ａ隊を見送って、10分間隔でＢ隊、Ｃ隊と出発する。デポ地点でＢ、Ｃは合流。滝田隊員が不調のため、川崎と代わった旨。ルートは所々右側を巻くが、基本的に稜線通し。Ａ隊が雪線に抜けるのが確認できるが、このころより隊員の好、不調の差が現れ始め、今後の行動をどうするか思案する。標高差1,000ｍの初めての荷上げはきつく、結局、森山、脇田、滝田は雪線の手前に荷をデポし、５人でＣ１へ。ＢＣから６時間30分かかっていた。

８月１日（晴れ時々曇り）　全員レスト

ゆっくりと10時に朝食。洗濯、ゴミ焼却、読書等各自思い思いに過ごす。志小田登攀隊長と今後のタクティクスについて打ち合わせる。Ｃ３建設をめぐって意見が分かれるが、決定を先にのばすことで一致。

昨夜から滝田隊員の不調が著しい。ひっきりなしにトイレへ通っている。下痢は遠征に付き物なので初めはあまり心配していなかったが、どうもただごとではない。夕方６時30分頃からガモフバッグに入れる。気圧で800ｍ位高度を下げるとだいぶん楽になるという。しかし１時間ほどで息苦しさを訴えられ、あわてて外に出す。しばらくは気持ちよさそうに眠っていたがまたトイレに通い始める。明日ラサに下ろすことに決め、今夜は隊員が交代してガモフバッグに入れることにした。

８月２日（晴れ）

飛田、天城が付き添い、他の隊員は２人１組２時間交代でポンプを踏む。滝田にはライターを持ってもらい酸欠の兆候が現れたら一旦チャックを開け空気を入れ換え、直ちにまたポンプを踏む。45分おきにこれを繰り返す。チャックを開けると二酸化炭素でランタンの火が暗くなるのがはっきり分かる。効果はあるものの使い方に気を付けなければ恐ろしいものなのだ（なお、この件に関して、後日、これはポンプアップが足りなかったか部品が合っていなかったからで、通常はこのようなことは起こらないとの指摘を受けた。その可能性は十分にあるが、ここではわれわれの行った処置の記録としてお読みいただきたい――天城）。

明け方うとうとしている私を尻目に飛田さんが朝食の準備をする。いつものことながら素晴らしい気配りと計算である。志小田、張が先行しマヨン村でポーターを雇い、公路まで行って車を頼む役、脇田がＢＣで、森山が中間点でのトランシーバー係、他の隊員が滝田に付き添い交代で背負う役割と決め７時発。しかし滝田は頑張って自力で歩く。昨日あれだけひどい下痢に悩まされたのに大した体力だ。３時間半で公路に着く。車は捕まらず、30分ほどたった11時、何という幸運、ラサに下っていた趙連絡官、鮫川、石川を乗せた車が戻ってきた。再度趙さん、飛田さんが付き添って、ラサの病院へ。全員ＢＣに戻って一息ついたのは15時過ぎだった。

明日の行動について志小田と話し合う。13人の隊員で明日動けるのは９人。高橋をＡ隊に入れるが、昨晩皆休んでいないし、Ａ隊はＣ１泊まりとなるため、この状態ではきつそうなのでもう１日レスト。Ｂ、Ｃ隊が荷上げと決める。

８月３日（曇り後晴れ、夕方雨）Ａ隊、石川：レスト、Ｂ、Ｃ隊（天城、野口、森山、脇田、加藤、森）：Ｃ１への荷上げ、鮫川：デポ地点まで順化行動

２度目の荷上げとなるため、途中のデポ品を回収しながら登って前回より１時間ほど早くＣ１へ。テントを張る予定だったが対岸の山から黒雲がわきはじめ、悪天に捕まりそうだったので早々に下山。しかし結局悪天はこなかった。ＢＣに着いたら昨日滝田に同行した飛田さんが戻ってきており、滝田から赤痢菌が検出されたという。他の隊員も罹っている可能性もあるため、薬を調達してきてくれており、全員それを飲む。また念のため１、２日レストとして体力の回復を図るとともに様子を見ることを提案され、とりあえず明日はレストとする。今まで使っていたトイレを埋め、作り替える等できることから予防に努める。

なおＢＣに戻ったところで脇田隊員から胃痛のため今回の登山からのリタイヤの申し出があり、私は「しばらく預かりますから、もう少し様子を見てもいいのではないですか」と答え、本人もそうしてみると言った。しかしこれはとんでもない判断ミスだったようで、その付けは後日現れる。

8月4日（晴れ一時雨）　レスト

午前中はトイレ作り、滝田の個装の洗濯等。昼食は鮫川作のチャーハン、森作のゼリーのデザート付き。午後からは自由時間。19時30分頃、何と趙さんとともに滝田隊員が戻ってきた。ずいぶん早い復帰に驚くがともかく一安心だ。

今日1日のみんなの様子を見て大丈夫そうなので、明日は行動と決める。

三角岩登攀

8月5日（晴れ）　A隊（志小田、飛田、川崎）C1入り・三角岩基部工作　7時50分BCを出発。9時10分、デポ地点到着。初めと比べると大分速くなったが、全く苦行以外の何物でもないガレ場登りである。12時C1着。1度目のC1入りと比べて1時間程速くなった。

志小田はC1の整理。飛田、川崎の両名で三角岩の基部取り付きまでのルート工作へ。5ピッチをフィックスし、この日はC1泊まり。

B隊（高橋、森山、加藤）、C隊（天城、野口、鮫川、森）：C1への荷上げ。石川：5,500mまで順化行動。脇田、滝田：レスト

A隊から30分遅れで出発。雪線に出るあたりからA隊がルート工作をしているのが見える。われわれがC1に着いた13時30分頃には、5ピッチのロープを張り終えC1へ戻ってきた。ご苦労様。テントを張り足し、16時すぎBC帰着。

夜の交信で飛田さんから腰を痛めたようなので湿布を持ってきてほしいと言われる。困ったことになった。

8月6日（晴れ後風雪）　A隊（志小田、飛田、川崎）：三角岩ルート工作

軽い頭痛をおぼえながら起床。天候はまずまず。ラーメンの朝食を済ませて8時30分C1を出る。昨日のフィックスをユマーリング。途中の小さなクレバスから過去の登山隊のフィックスロープがのぞいている。

壁の傾斜はさほどではないが、6,000mを越える高度でのダブルアックスはさすがにしんどい。途中のビレイポイントにも残置ハーケンやフィックスロープがあった。三角岩上部まで19ピッチを終始飛田さんがトップを務めた。

14時に三角岩を抜けた。下りはアップザイレンを繰り返し、30分で一気にC1まで。下りの何と速いことか。テントに入り、コーヒーと焼きそばで一息つく。壁の中にいたので、そういえば朝からほとんど食べていなかった。

C1で下から上がってきたB、C隊とD隊と合流する。B、C隊はC1泊、D隊の石川さん、滝田さんは15時BCに下る。

16時頃から雷鳴が轟き始め、間もなく真横に稲光が走り、激しいあられが降る。大雷鳴と閃光が同時に走り、雷の真っ直中にいることを知る。激しい風、耳をつんざくような雷鳴。会話もできないほど激しくテントを叩くあられ。その後テントの雪かきをする。

BCに降りた滝田さんとの20時の定時交信では、BCでは16時から17時の間にあられによる5㎝以上の積雪があり、隊員用のテント3張りがすべて潰され、現在は本降りの雨になっているとのこと。中国側スタッフも含めて、BCのメンバーは苦労しているのだろう。

20時30分過ぎ現在、C1はしんしんと雪が降る。雪崩が心配で、これでは明日は三角岩には入れない。

B隊（高橋、森山、加藤、鮫川）、C隊（天城、野口、脇田、森）：C1へ移動、D隊（石川、滝田）：C1往復

雪線のあたりからA隊が三角岩を抜けて稜線へ出るのが見える。3人とも元気そうで頑張ってくれている。第一関門はクリアーできたようだ。脇田隊員もゆっくりながら元気そう。胃を空にしなければ痛まないと言う。

B、C隊は初のC1泊まり。激しい降雪の中、野口さんが何度も雪かきをしてくれる。こまめで勤勉な姿に頭が下がる。

8月7日（雪後曇り）　A、B、C隊：BCへ

朝はまだ雪が舞っていたのでとりあえず行動を中止する。10時頃から明るくなり始めたため、志小田、飛田と3人で検討した結果、一旦BCに下り、体勢を立て直すことにする。12時過ぎC1発。これまで雪が着いていなかったガレ場も雪をまとい美しい。この下りで鮫川隊員がBC直前に転倒して捻挫を負う。BCに着くと昨夜つぶされた隊

員用テントは石川、滝田両名によって立て直されていたが、1張りだけはポールが折れ天井が下がり、情けない姿になっている。

再度、志小田登攀隊長と今後のタクティクスについて話し合う。そろそろ大詰めが近づいてきており、アタックへ向けた日程調整も睨まなくてはならない。アタックメンバーの仮決定をする。

1次隊：志小田、飛田、高橋、森山、加藤、川崎、2次隊：天城、野口、脇田、鮫川、石川、滝田、森。これを念頭に置いたローテーションでC2までの荷上げを行ってアタック体制を作り、その段階で正式にアタックメンバーを決める。1次隊がC3を作りながらアタックする。

BCに入ってから仕込んだ「どぶろく」が程良く発酵しており試飲する。

8月8日（晴れ）　**A、B、C隊**：レスト、**D隊**（石川、滝田）：C1へ移動

D隊は順調に行動している様子。どうやら一度は出遅れた2人とも何とか間に合いそうだ。しかし鮫川隊員は昨日の捻挫のため足首が腫れ上がり痛々しい。また森隊員も発熱で元気がない。せっかくここまで頑張ってきたのだから、何とか回復してほしい。

昼は川崎作の日本そば。圧力釜でそばを茹でるのは難しいのだが、うまく茹だっていておいしかった。

私は1人でBCから山裾を北上し、来年の登山隊の偵察をかねて主峰の様子を見に行く。1時間ほど行くとはっきりと主峰の西面が見渡せる地点に着く。下部はよく見えないが、すっきりした雪稜が山頂まで突き上げている。ルートになりそうに見える。

8月9日（曇り時々晴れ一時雨、雪）　**A隊**（志小田、高橋、川崎）再びC1へ、**B、C隊**：レスト、**D隊**（石川、滝田）：C1→BC

飛田さんの持病である腰痛が悪化、B隊の高橋君と飛田さんを入れ替える。

天候はあまり良くなく、上部はガスがかかっている。8時にBCを出発し11時50分にC1着。始めの頃に比べて大分速くなり、4時間弱でC1に入れるようになった。途中でC1から下る石川さん、滝田さんとすれ違いエールを交換する。

レーションを食べての小休止の後、志小田、川崎で降雪で埋まっているであろうフィックスの掘り起こしに出る。3ピッチ程進む。この頃からガスが雪に変わり、やや湿った雪がしんしんと降り続く。14時のBCとの定時交信では下は雨とのこと。15時30分頃から雪は小降りとなり、明るくなる。

稜線へ

8月10日（曇り時々晴れ夜雪）、**A隊**（前回と同じ）：上部稜線ルート工作

天候は相変わらずはっきりしない。三角岩の上半分はガスのため見ることはできない。

8時30分C1を出る。3人でフィックスロープを黙々とユマーリングするが、前日の降雪で埋まっており、ピッチによっては掘り起こしに相当消耗する。三角岩は19ピッチ2時間ちょっとでトレース。

この先C2予定地までの稜線のルート工作を行う。視界が悪く、しばし立ち止まってはルートを確認しながらの登行となる。右側が氷河にスパッと切れ落ち、部分的には雪庇も出ているのでその点に注意しながら進む。C2手前と思われるピークまで11ピッチをフィックスしたところで完全にホワイトアウトとなる。

風が強く、気温も下がり始めているようだ。下との気温の差を感じる。15時、ガスと風の中、赤布、フィックスロープなどの荷物をデポし、下降を開始する。16時にC1に戻ると、B隊C隊がすでにC1入りしていた。

B、C隊（天城、野口、飛田、森山、加藤）：C1へ移動、石川、脇田、鮫川、滝田、森：レスト

朝出発しようとしたとき、脇田隊員から「胃から内出血が始まったようで、タール状の便が出る。昨年秋に胃潰瘍を患ったがそれが再発したようだ。リタイアしたい」という申し出があった。これで全員登頂の夢は消えた。胃を空にしなければ痛まないと言っていたので安心していたのだが、悪化させてしまった。下る必要があるかどうか聞いたところ、大丈夫という返答だったので、ともかく出発した。

Ｃ１着14時。Ａ隊もＣ２直前までのルート工作を終えて戻ってくる。

17時の交信で脇田隊員の様子が伝えられ、自力で歩けるうちにラサに下りたい、このまま放置すると吐血が始まるかもしれないと言う。飛田、志小田、天城で緊急に協議していろいろ悩んだ末、またしても飛田さんが付き添って下ることになった。熱の下がらない森隊員も下ることを希望していると言う。この日のうちに飛田さんはＢＣに下る。感謝とともに申し訳ない。

８月11日（晴れ）　**Ａ隊**（志小田、川崎）：Ｃ２建設

久しぶりの快晴の朝である。今日は昨日届かなかったＣ２までルートを付け、Ｃ２を建設する日である。日程的な余裕は既にない。

８時10分Ｃ１発。10時にＢＣからラサへ出る公路に向かう飛田さんと交信する。10時10分に三角岩をぬける。晴れているが昨日と同様風が冷たい。Ｃ２へ続く稜線は、部分的にすねから膝下位のラッセルがあり、酸欠にあえぎ、呼吸を整えながら登る。12時、広いプラトーのＣ２予定地に到着する。風の通り道のようで非常に風が強い。

高橋君にテントの整理を頼み、志小田、川崎でアンザイレンし、ルートの偵察に出る。斜面をトラバース気味に栃木ルートに入っていくが、クレバスが眼下に縦横に走り、あまりいい感じがしない。登り返し、稜線上をもう少しつめていって可能性を見ようと川崎君と進むが、小さなピーク迄あがって見ると、深いカールの縁を大きく巻いて稜線は延びており可能性を感じない。

再び下降し、栃木ルートに入る。雪田がつながっており、見た目ほど悪くはないことが分かる。赤布をデポしてＣ２に戻り、Ｃ１へ下降する。途中でＣ２への荷上げのＢ隊、Ｃ隊とすれ違う。

Ｃ１着14時30分。休憩の後、そのままＢＣへ下山し、16時30分着。通訳の張さん、コックの黄さんが用意してくれた甘い紅茶が疲れた体にしみわたるようで非常にうまい。19時には荷上げのＢ隊もＢＣに下る。

Ｂ隊（高橋、森山、加藤）Ｃ１→Ｃ２→ＢＣ、**Ｃ隊**（天城、野口）Ｃ１→Ｃ２→Ｃ１（泊）、**Ｄ隊**（鮫川、石川、滝田）ＢＣ→Ｃ１

Ａ隊から高橋隊員が荷上げに回ってくれた。頼もしい限り。他の隊員の倍近い荷を担いで登る。ヤクという異名をとるのもよく分かる。さぞ重たかろうに。高橋以外は三角岩の登りは初めてで、ヒマラヤ登山らしくなってきて、いよいよ佳境に入ってきた感じがする。Ａ隊によって張られたロープにユマールをかけて一歩一歩慎重に登る。順番待ちもあり、４時間余りかかって稜線へ抜ける。ここからは緩やかな雪稜を２時間ほど行くと小広いピークにつく。この下の鞍部にＣ２地点があった。Ｃ３予定地、山頂が望める。複雑そうなルートで、視界がきかなければ先へは進めそうもない。天候が成否を左右することになるだろう。高橋、加藤の頑張りで２張りのテントを立て、Ｃ１へ。高橋、森山、加藤はそのままＢＣへ下り、Ａ隊とともにアタック前の休養に入る。捻挫が治りきったわけではないだろうが、鮫川も石川、滝田とともにＣ１入りしてきた。

８月12日（曇り）　**Ｃ隊**（天城、野口、鮫川、石川、滝田）：Ｃ１→Ｃ２→ＢＣ、**Ａ、Ｂ隊**：レスト

８時出発予定が１時間遅れて９時。鮫川隊員は苦しそう。フイックスロープに雪が付着しており登りにくい。昨日より１時間早くＣ２へ着いたが、残念ながら何も見えない。ともかくこれでアタック体制は完了した。三角岩からは懸垂下降でＣ１へ。ここで鮫川隊員からこの先の行動からのリタイアの申し出がある。先の見通しが明るくあとひと頑張りで登頂できそうであるならば慰留できたが、まだＣ２からの見通しもついておらず、また捻挫も完治していないようだし、仕方がないかもしれない。２人でポツリポツリと話しながらゆっくりとＢＣへ下る。

飛田さんが葡萄とトレペの土産とともに戻ってきていて、脇田隊員の帰国を伝える。森隊員は趙さんと14日にＢＣに帰ってくるという。

８月13日（曇り一時雨）　全員レスト

志小田、飛田、天城でアタック体制の検討。メンバーは10人。テントの都合から４人と６人にするか６人と４人にするか迷ったがＣ３への工作、荷上げのこともあり、また、１次隊のみのアタックとなった場合に１人でも多く山頂に送りたいの

で後者を選択。

1次隊：志小田、飛田、森山、加藤、高橋、川崎

2次隊：天城、野口、石川、滝田

鮫川、森はＢＣでサポート

1次隊がＣ２で停滞しても１次、２次の入れ替えはなし。状況によるが、基本的には停滞１日ならば１次隊のみのアタック、２日になれば両隊ともアタックはなし。日程的には押し詰まっている。

アタック体制整う

8月14日（曇り時々晴れ）　**1次隊**：アタックへ（ＢＣ→Ｃ１）

薄曇りの中、他の隊員の激励の見送りを受けながら10時にＢＣを出発する。何度登っても単調で難儀なガレ場も「もうここを登るのはこれで最後だ」と自分をなだめつつ黙々と登る。

14時30分Ｃ１着。ガスに囲まれたがすぐに切れる。デポしてある２次隊の個人装備をツェルトに移し、エスパース１張りを撤収する。お茶を沸かし、焼きそばを食う。

高所では１日の中で酷暑と酷寒を同時に味わうことができる。すなわち、陰れば寒気、一旦晴れるとテントの中は炎熱地獄である。

2次隊等：レスト

朝、１次隊を見送る。健闘を祈る。夕方、森くんが趙玲玲さんとともに戻ってきた。趙さんが骨付きの鶏のもも肉を買ってきてくれて夕食は特製のロースト・チキンを食べさせてくれた。

8月15日（曇り時々晴れ後雪）　**1次隊**：Ｃ１→Ｃ２

５時30分起床、曇り。食傷気味である定番のラーメンの朝食を食べ、７時10分にＣ１を出る。志小田と飛田が先行し、後から川崎が追いついてくる。10時に三角岩を越え、12時にＣ２手前のスノーピークに達する。残念ながらガスの為に本峰は確認できない。後ろの３人はやや遅れているようだ。

13時、Ｃ２に到着した加藤さんらにテントの整理を頼み、志小田、飛田、川崎でルート偵察・工作に出る。コンテでクレバス帯の中に入っていくが、雪面がつながっており見た目より悪くはない。赤布を打ちながら、１つのクレバス帯を越えてプラトーに出るが、次の雪田にもルートは容易につながることが分かる。視界さえもらえば「いける」と確信する。

明日は暗いうちから歩き始めて、できればアタックまでいきたい。15時30分Ｃ２に帰る。疲れた。

2次隊：ＢＣ→Ｃ１

鮫川、森両隊員と、趙さん、張さん、コックの黄さんの見送りを得て出発。ガレ場の登りも今日が最後。三角岩を登るＡ隊の姿が確認できる。天気は良くこれならばＣ２から先へルートを伸ばすことができるであろう。２次隊にもチャンスはめぐってきそうだ。５時間弱でＣ１へ。

8月16日（曇り一時晴れ夕方雷雪）　**1次隊**：ダブルボッカでＣ３入り

早発ちの予定で４時前に起きるが、濃いガスの為、テントの中で明るくなるのを待つ。かなり寒い。８時、明るくなって出発したがガスが非常に濃く間もなくホワイトアウトの状態になった。昨日の工作地点までは赤布を頼りに何とか進むがここでアウト。全く視野がない状態で前に進めない。強風とガスの中、寒気に耐えながらガスが切れるのをじっと待つ。Ｃ２に戻るべきか迷い始めた頃、ガスが切れる。われわれは、今日中にＣ３を作らなければ２次アタックのチャンスが消えるところまで日程的に追いつめられていた。

この晴れ間のチャンスをつかむべく、志小田、飛田が空身で赤布を打ちながらとにかくルートを延ばし、残りの４人で６人分のザックをダブルボッカしてＣ３を目指す。４人にとっては大変なアルバイトとなった。

11時50分、Ｃ３予定地点に志小田、飛田着。２人で４人の所に戻り、全員でＣ３に入ったのが13時20分。呼吸を切らしながら、ノロノロとテントを設営する。

この晴れ間を利用して、15時過ぎに志小田と飛田で頂上稜線へルート工作・偵察へ出る。懸垂氷河を回り込み、赤布を打ちながら１時間程ルートを延ばす。頂上まで雪面がつながっていることを確認し、Ｃ３に下る。

16時、２次アタックのためにＣ２入りした天城隊長と交信。この頃からまたガスが出始め、あられが激しく降る。遠くで雷鳴が聞こえる。

2次隊：C1→C2

10時発。滝田が先行する。交信で1次隊の苦闘が伝えられる。大変だろうが頑張ってほしい。やがてC3到着の報が伝えられる。これで王手がかけられた。

C2手前のピークからC3へのルート、C3のテントが確認できる。15時20分C2着。18時30分頃から約1時間、激しい雷と降雪があった。

登　頂

8月17日（晴れ時々曇り）　1次隊：登頂

薄曇りの中、8時にC3を出発する。時折、ガスが濃くなり視界を失う。すねまでのラッセルが続き、傾斜が増すと共に苦しさが増してくる。喘ぎ喘ぎ、5歩進んでは、呼吸を整え、深呼吸を繰り返すという登りが続く。ピークそのものはガスの中、斜面の陰になり確認できない。ピーク下の黒く露出した岩と自分の高さの差がつまってくることで自分が高みに進んでいることを確認し、じれる気持ちをなだめながら登る。

頂上直下、長くラッセルを務めてくれた高橋君に代わって川崎君がラッセル。「登攀隊長が先に上がれ」という飛田さんの言葉に固辞したが、背中を押されるようにして雪稜を越えると山頂に飛び出した。7,206m、周りにここより高い所はない。12時48分、志小田、川崎、高橋、飛田が登頂。ガスの中、周りの視界はない。山頂からヤムドク湖を見るのを楽しみにしていたが残念であった。当然のことながら今回の遠征も苦しいこともいらだつこともあったが、それらのすべてが昇華した瞬間であった。

やや遅れて13時11分森山さんが登頂。森山さんの笑顔の中には涙があった。13時40分、ガスの濃くなる中、加藤さん登頂。山頂で一服することを決めていたという加藤さん。登頂写真のあと旨そうにたばこをふかす。

14時5分に風が出てきた山頂をあとにする。団子になるアイゼンにいらだちながら、駆け下りるように下る。15時35分、既に2次隊が入っているC3に戻る。笑顔で迎えてくれた天城隊長の顔を見て、1次隊としての責任を果たせたという思いを強くし、握手を交わした。隊長以下2次隊の祝福を受ける。差し出された甘い紅茶が腹にしみた。

2次隊へアタックルートの説明をし、明日の健闘を祈りつつC3を後にし、C2まで下った。C2着17時30分。短い日程でのタイムリミット寸前、こうして1次アタックは終わった。

2次隊：C2→C3

8時45分発。1次隊も山頂に向かっている。あわよくば2次隊も今日のアタックが可能かもしれない。ルートは1次隊によって丁寧に赤布が打たれており迷うことはないが、昨夜の降雪のためトレースは消え膝までのラッセルとなる。4人の間隔が縦に広がってきたが、アタック時の登り方の参考にするため交代でラッセルをするよう指示を出す。先ほどから滝田の状態が悪い。歩き始めればスピードはあるが休憩の時は本当に苦しそうだ。復帰後昨日まではあんなに元気だったのに、やはり順化行動が不十分だったのだろうか。11時45分C3着。

1次隊がニンチンカンサ直下の斜面を登っている姿が見え隠れする。われわれも今日アタックするなら急がなければならないが、①この時点では1次隊のアタック時間が分からない、②滝田の調子が良くない、③夕方に雷があるかもしれずその前にC3に帰り着けないかもしれない、の理由から今日のアタックは中止にした。

12時48分、待望の第1報が志小田登攀隊長から届く。良かった。心からの祝福と労いの言葉をかける。2次隊のメンバーもメッセージを送り、握手を交わす。13時40分には6人が全員登頂した。

滝田隊員は昏々と眠っている。熱は37度6分。ここまで来て残念だが下らざるをえないだろう。1次隊が戻ってきたら一緒に下ってもらおうかと思う。

4時前には1次隊が全員C3に帰還。喜びのひとときをすごす。またしても飛田さんに付き添いをお願いをして、滝田隊員も1次隊とともにC2に下っていった。

8月18日（曇り）　2次隊登頂

2次隊の行動は野口さんの登頂記に譲りたい。昨日C2に下った1次隊と滝田のうち、志小田、高橋、川崎はC2にてわれわれのサポート。飛田、森山、加藤、滝田はBCへ。鮫川、森はBCから

Ｃ１へ荷下げに上がりＢＣへ。

８月19日（晴れ）　**２次隊**：Ｃ３→ＢＣ、志小田、高橋、川崎：Ｃ２→ＢＣ、飛田、森山、加藤：ＢＣ→Ｃ１→ＢＣ（荷下げ）

昨日とうって変わって快晴。荷をまとめＣ３を後にする。何度も振り返り登頂の喜びをかみしめる。Ｃ２ではさらに荷が膨れる。三角岩を下るとＣ１にはＢＣから３人荷下げに上がってきていた。おにぎりを貰い一息。ここでもさらに荷は膨れたがゆっくりゆっくり下る。16時45分、最後の森山隊員がＢＣに戻って、すべての登山活動を終えた。なお残念ながらＣ１、Ｃ２間のフィックスロープ21本とスノーバーは力量不足のため残置した。

８月20日（晴れ）　レスト

気候が変わったのか急に寒くなった。終日のんびりと身体を休める。夕食は張さん、黄さんが腕によりをかけてマーボー豆腐、大根の煮物、春雨のスープ等を作ってくれる。

８月21日（晴れ）　隊荷整理、ＢＣ清掃

すでに鮫川、滝田、森の努力でおおかたの装備の整理は済んでいたので作業は短時間で終わった。景色を見ながらのんびりとゴミを燃やす。

夜、ＢＣじまいのささやかなパーティーを開いて、中国側スタッフの労をねぎらった。

（Ａ隊、１次隊は志小田、他は天城記）

帰路キャラバン

鮫川　太一

８月22日（晴れ）　ＢＣからラサへ

25日間過ごしてきたＢＣも今日が最後の日である。その間病気・天候不順・村人による小物盗難など辛かったこと、楽しかったことが思い出される。隊荷は昨日が終日休みであったためある程度プラパールに収めていた。メステントと５つのテント分の共同装備と食糧を撤収する。その後プラパール等をヤクに荷積みするのは思うようにはかどらない。この村のヤクは積まれるのを嫌がり積んだ後あばれ、荷物をたたきつけたり、山の中腹に逃げ込んだり、牧童たちも手を焼くヤク立たずもいた。そんなわけで22頭のヤクに積むのに、２時間もかかってしまった。マヨン村の人家手前まで１時間のキャラバン途中、白い峰々の上空にひとすじの虹が浮かび、まるでわれわれを見送っているかのようだ。

カンパ・ラから望むヤムドク湖の雄大な景色は菜の花も見られず、すでにすっかり秋の趣であった。午後６時にはラサのヒマラヤ・ホテルに到着する。ヒマラヤ協会に無事を報告すると、神奈川隊の爆風雪崩遭難を聞かされショックを受ける。われわれの家族もどんなに心配をしたことだろう。

８月23日　ラサにて隊荷の整理

今日はチベット登山協会倉庫にて残った食糧や共同装備を整理し、テント等を乾かしたり、倉庫に収納する共装リストに記入した。午後は、八角街にある洋風レストランにて、思い思いのメニューを存分に舌つづみを打ち満足。その後は自由行動で、大昭寺見学する者、新華社書店にてチベット地図を買う者もいた。ホテルでは漢字にチベット文字入り篆刻印鑑が土産品として注文を受けていた。

８月24日　ラサ

午前中はポタラ宮殿見学。ラサの盆地からはひときわ高い居城で急な階段を登る。宮殿の中には僧侶があまり見あたらなく、人民解放軍風の守衛が目についた。暗がりの城内から仏像やら、歴代の王の座像が見られ、かつての政教一致の強大さが偲ばれる。ラサの印象は予想以上物が溢れ、ファッションも大都会並みと感じた。とにかくカラオケの店も多く、夜の女たちが昼間から客を呼び込む店が軒を連ね、ネオンサインが目についた。

夜は１か月お世話になったコックの黄さんとお別れ晩餐会をした。口数は少ないが誠実さがにじみでて、日本人好みの、しかもラサのレストランよりおいしい食事をたくさん作っていただき感謝にたえない。

８月25日　ラサから成都へ

5時起床、ラサから成都間では2時間弱の飛行であるが、機中にて、ナムチャ・バルワ、ミニヤ・コンカ峰が遠くにはっきり望めた。成都の昼はとにかく暑い。四川省登山協会のマイクロバスに乗りゴージャスなラサグランド・ホテルに着いた。この地は三国志の舞台になり諸葛孔明などが活躍した土地柄で、「武侯祠博物館」もある公園を訪れた。夕食は本場の火鍋で野菜・肉・魚など数え切れない品目を好きなだけ取るバイキング形式、とにかくすべてチャンポンとはいかにも大陸的な料理で楽しい一時を過ごすことができた。

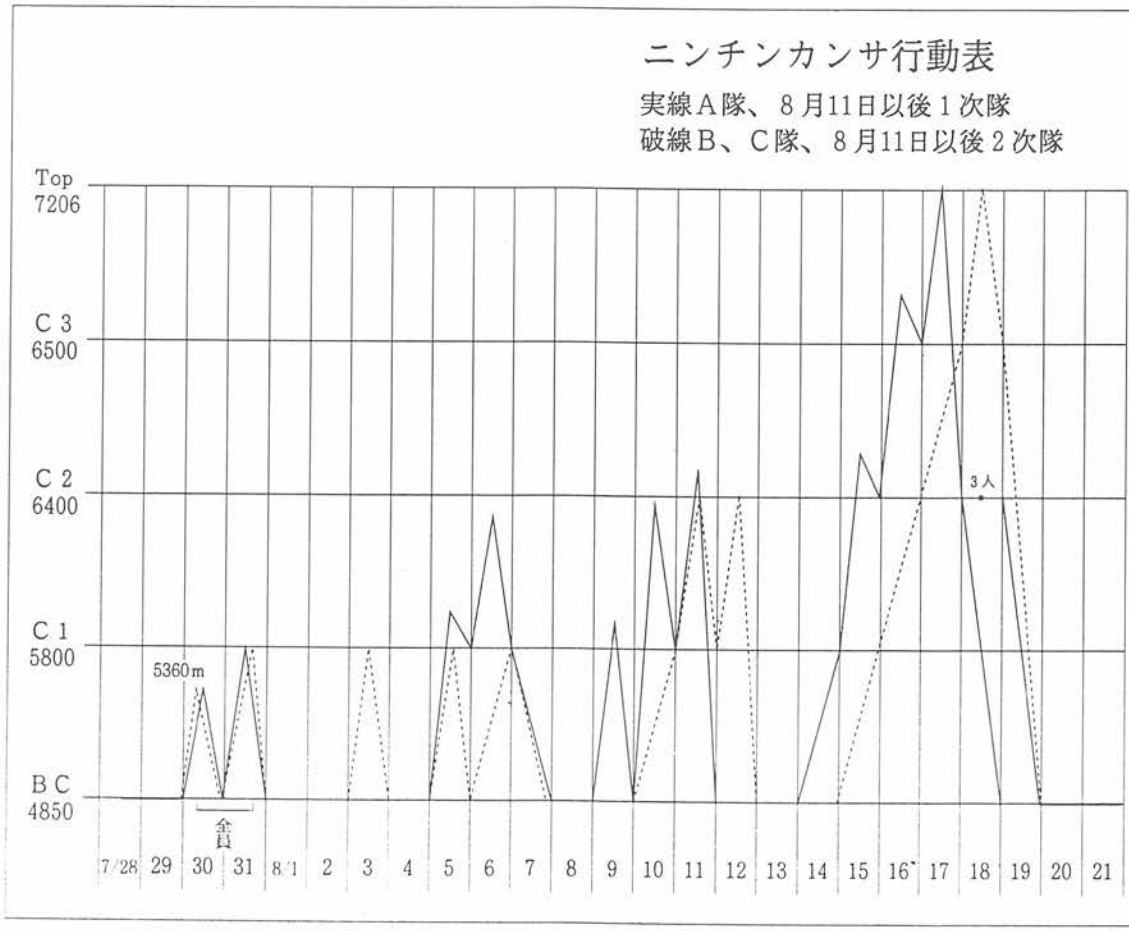
8月26日　成都から北京へ

早朝、通訳の張さんが見送りしてくれた。彼は明朗快活で料理を作ると「おいしいですよ」の大きなかけ声。それだけで食欲がわいてしまう。実際これがおいしいのだ。来年2月に来日するというので再会が楽しみである。2時間30分で北京に到着。前門飯店に着くと山森専務理事と35日ぶりに再会、登頂を喜んでくれた。ホテルでは今回の登山隊の反省会と報告書の打ち合わせ等をした。夕食は中国登山協会の方々を高層ビルの中にある日本料理店に招待し、曽曙生主席の挨拶、天城隊長のお礼の挨拶を交わした後、9名の登頂証明書を一人一人授与され、皆存分に感激し、最後の晩餐を心ゆくまで楽しんだ。連絡官の趙玲玲女史ともこの日が最後である。BCとラサの病院間を2往復も快く同乗していただき本当に助かった次第である。

8月27日　北京から成田へ

いよいよ今日中に日本の家族のもとに帰れる。とはいえ、帰ればまたあわただしい仕事が待っていると思うと複雑な心境である。成田に着けばそれぞれが家族の元に散り、ひと夏の青春は終わった。

（鮫川太一記）



第１次隊登頂記

森山　安次

朝６時に起床しテントの外をのぞくと、昨夜来の小雪がちらちらしているが、アタックに出発する頃には天候が回復することを願って朝食にとりかかる。が、寝不足なのか食欲があまりないが無理やり天ぷらソバを胃袋に収める。

昨日の午後にルート工作した、志小田登攀隊長、飛田氏からの話で、メンバー全員今日中に頂上に立ち、Ｃ２まで下降する自信と決意で朝食を終わらせ出発準備にとりかかる。

テント内で身支度を終え、テントの外に出てみると霧のため、視界が50ｍ位であるが、視界がだんだん良くなってきたので、登頂できると確信した。

気温は低くなく、しかも風がないのでオーバーミトンは使用しなくても大丈夫と判断し、ヤッケのポケットにしまう。

テントの周りの積雪状態や昨日のＣ２からＣ３までの積雪、およびＣ３上部のルート工作した所の積雪状態から判断してアイゼンは装着せずに登ることにした。

積雪状態、頂上までのルートの傾斜等を考えるとピッケルよりストックの方がよいと判断して、ストックをＣ３まで持ち上げた５名は、ピッケルをザックに収納しストックを使用した。ピッケルを使用したのは、ストックを持ち上げなかった１名だけであった。

ザイルを使用することを考えて、全員ゼルプストバンドを装着した。

昨日のルート工作は、１時間程度なのでルート上に立てる標識の竹竿が20本以上Ｃ３にあるので、これを立てながら登攀するので持参する。

出発準備をしている時、ここ３日間の天候変化のパターンを考えると、午後５時前迄にＣ２まで下降していないと雷に遭遇するのでは、と思った。

あたりが明るくなり、小雪もやんだ８時頃Ｃ３を出発する。霧はまだ晴れてないが先程より視界は良くなり、昨日ルート工作で立てた、２本先の標識が見える。

１次隊登頂。左から加藤、飛田、森山、志小田、川崎　（撮影、高橋）

昨日ルート工作で、標識の竹竿を立てた最終地点までは、傾斜はきつくなくヒドンクレバスもないとのことなので、アンザイレンはしない。

昨夜の雪と風でルート工作でつけたトレースが消えておりＣ３出発からラッセルとなる。

Ｃ３の出だし１ピッチ目は自分がトップになって行く。トップを交代するまでのラッセルの深さはせいぜい足首の上位である。１本目の標識を右側（谷側）から通過しようとしたら、志小田登攀隊長が左側（山側）から通過するように指示したので、２本目からは左側を通過する。

出だしから３本目の標識の付近で「交代」という声で最後尾につき周りを見渡しながらゆっくりと登っていくと霧はすこしずつ晴れてきて視界が良くなってきた。

交代してしばらく登った後、左後方を見ると昨日Ｃ３から見えていた上部にクレバスがある尾根を回り込んだことが判った。

交代した付近までは、トラバースであったがいよいよ頂上に続く斜面に入り、徐々に傾斜がきつくなってきたと共に、ラッセルの深さも膝下は当

たり前で、ときどき膝より上になる場所も出てきた。

2回目のトップでは、雪の深さは膝下で所により膝上であるが、傾斜は一定なのでリズムを崩さずにすむ快適な登攀である。

昨日、ルート工作した最高到達点に到着したので、全員休憩となり、時計を見るとC3を出てから約1時間経過していた。

ここから先に、ヒドンクレバス等があるかもしれないのでトップとセカンドはコンテニュアンスになり、残りのメンバーは、ノーザイルで進む。自分はここから最後尾につく。

3、4番手についた人が、標識の竹竿を視界の範囲内に立てていく。

頂上が見えないなかトップが数十m進んだ時、コンパスを見ながら登攀していた志小田登攀隊長が「左より（頂上稜線側）に登攀しているから右よりにルートをとるように」とトップに指示があり、トップは指示に従いいくらか右よりにルートを取った。これが正解であった。

霧が晴れ進行方向に頂上が見える。なぜ頂上と判断したかというと、周りのピークの中で一番高く、しかも今回の遠征前に日本で見た、中国の本（『中国登山指南』）に載っている写真と左右逆だけれど頂上の片側が切れている形が類似しているためである。

自分たちより低い所の懸垂氷河は霧で視界がきかないが、自分たちと同じ高さより上は霧が晴れ日差しが出てきて暑くなり、ヤッケを脱ぎたくなってきた。

2回目の大休憩をする。頂上までの距離とここまでのスピードを考えると、あと1時間半位ではないかと思った（実際は1時間半以上であった）。

最後尾で出発するが、頂上のはるか下で標識の竹竿が無くなってしまったので、登頂して竹竿がある所まで下山する間、天候の急変がないように祈った。

自分の前を登攀している人の登攀スピードが遅くなり、先行している4人との間隔が開く一方で、このスピードだと疲労が増大するだけであるし、追い越し可能な傾斜であるので、追い越して自分のリズムで登攀を続ける。

先行している4人が頂上と思われる頂きの陰に消えたので、時計を見ると12時45分前後であった。

傾斜はC3～頂上間のなかで一番きついが、頂上まであと100m以内と思われるから、午後1時には頂上には着きたいと思い、また着いた時なんと言おうかと考えながら登る。

午後1時過ぎてもまだ登攀中であるが頂上は目の前である。周りを見るといくらか霧が出てきたが、天候が悪化する兆候とは違う。

午後1時11分に頂上の片隅に立つ。先に登頂している4人の所に行き、手袋を取り素手で握手を交わした後、4人から祝福の言葉をかけられ、すでに開局されてるトランシーバーから、2次アタック隊の4名からも祝福の言葉をかけられる。

頂上は雲海の上のため周りの景色は何も見えないが、風は無く手袋とヤッケを脱いでも寒くなかった。

第２次隊登頂記

野口　道雄

６時起床、朝食を食べ８時５分にＣ３を出発する。ヒマラヤの頂上を目指してアタックをするのは初めてで何か興奮する。

昨日、Ｃ３まで登りながら体調悪く、第１次アタックのメンバーとともに下山して行った滝田隊員がいないのが非常に寂しい。Ｃ３まで上がって体調を崩し登れないなんて本人も残念で仕方なかろう。

昨夜からの降雪は止んでいるが天候はガスって視界20ｍ～30ｍであるが、いつものパターンで晴れてくるだろうと期待する。安全を期して３人でツエルト、ＥＰＩガスおよびＰＰロープを分担、それに各人ハーネス、防寒衣に行動食を背負う。

Ｃ３周辺は新たに約15㎝の積雪があり、残念ながら昨日の第１次アタック隊のトレースは完全に消えてしまっているが、表面クラストしているのでこれはと期待したけれども、Ｃ３を設置したプラトーを抜けると足首上までのラッセルになり部分的には吹き溜まりで膝まで潜る。頂上は遠いので交替でラッセルするが、視界が悪く自分たちが何処の位置にいるのか分からず、ただ第１次アタック隊が設置してくれた赤布を頼りに登り続ける。

10時過ぎに一時太陽がガスの中に霞んで見え背中が暑く感じられ、晴れるかと思われたが駄目だった。ガスの中、雪の表面を見ながらラッセルをしていると雪面が光線によって２～３㎜の雪の結晶が無数に浮き出てキラキラと輝きとても綺麗だ。雪の結晶の大きさが日本と違うのか。３人のラッセルのため疲れるが天候が悪化したら登れないのでとにかくピッチをあげて頑張る。

Ｃ２との交信で上部のルートの見通しがついたので、約6,800ｍの地点に不要と思われる重いツエルト、ＥＰＩガスおよびバーナー、ハーネスをデポして荷を軽くする。

突然、頼りにしていた赤布が途切れてしまったが、ガスの中、周囲を探してどうやらニンチンカンサの頂上への最後の斜面と解るが、ここでピッチがぐっと落ち１歩、登って呼吸を整えてはまた１歩登るという苦しいもので、やはり7,000ｍの高度だと実感した。この頂上への斜面は、部分的には30度の傾斜を超え、２日続きの降雪のため雪崩ないか細心の注意を払う。この斜面で天城隊長とラッセルを交替するとスイスイと登っていく体力には驚いてしまった。そしてやっとのことで天城隊長のところに行くとそのすぐ先が頂上であった。

２次隊登頂。左から野口、天城　（撮影、石川）

この歳で7,000ｍ峰に登れたとは夢のようで思わず涙を出しながら天城隊長と成功の握手をし抱きあう。石川隊員もすぐ登って来たので３人で５ｍ先の頂上を同時に踏み再度、３人で握手をして喜びあう。時は13時50分でＣ３から約６時間の行動だった。また、天城隊長の頂上直下で私たちを待ち、一緒に頂上を踏むという行為にも大変感激した。

「天城隊長、志小田登攀隊長、隊員の皆さんほんとにありがとう。」「応援をいただいた我が東京白稜会、会社の人たち、登れたよー、ありがとー。」「家内、娘、ありがとー」と心の中で叫ぶとまた胸が熱くなってきた。残念ながら頂上はガスで何も見えなかったが登頂できただけで大きな喜びだ。

思えば1957年に東京白稜会に入会以来、「白き神々の座」ヒマラヤに魅せられ１度は登ってみたいと思いつつこの頃の時代はかなわず、その後の外国勤務、家庭事情等で中断したものの１度灯いた火は消せず10年程前より山登りを再開し、1994年東京白稜会50周年記念のライラ峰（6,986ｍ）の遠征隊に参加したが敗退、今回日本ヒマラヤ協会の遠征に入れて貰いほんとに尊い幸運を射止めることができた。

今遠征隊でも高山病等でラサの病院に入院したりした人が中国登山協会の連絡官を含めると６人もいたし、またそれまで天候が悪く第１次アタック隊の登頂がぎりぎりで第２次アタック隊は無理かもしれないと思っていたので大感激である。とりあえず無線でＣ２にいてサポートしてくれた志小田登攀隊長たちに登頂連絡をする。志小田登攀隊長も大喜びで祝福してくれる。

「野口さんほんとにおめでとう、野口さんには隊の誰よりも登って欲しかった。良かった、良かった。」「ありがとうございます。この歳で良く登れました、みんなのお陰です。」胸がこみあげて思わず涙声の交信になる。

Ｃ２で志小田登攀隊長と一緒にサポートしてくれた高橋、川崎隊員も祝福してくれ忘れられない時になった。天城隊長、石川さんも喜びの交信の後、３人で登頂の記念写真を撮りあって下りにかかるが、年齢による疲れか、高度差700ｍのラッセルで疲労したのか、足元がどうもふらついてバランスが悪い。自分ではもっと体力があると思っていたがこんなに消耗したのは初めてである。このルートは危険な場所がないがもし厳しいルートの下りだったら大変だと思った。天城隊長は赤布を回収しながら下っているので私も手伝うがこの作業も結構疲れる。

１次アタック隊は頂上からＣ３まで１時間15分で戻っていたが、私たちはホワイトアウトのガスの中を彷徨しているような感じで、２時間もかかってやっとＣ３に戻ることができ、そこでようやくほっとする。石川隊員も私同様だいぶん疲れている様子で、計画ではＣ２まで下る予定であったが時間も遅いし、本日はＣ３泊まりにしてもらい明日Ｃ３より一気にＢＣまで下ることにした。

Ｃ３（８：05）→ニンチンカンサ頂上（13：50〜14：30）→Ｃ３（16：30）

第2部　隊務報告

タクティクス
食　糧
行動食
装　備
輸送・梱包
通　信
医　療
環　境

ベースキャンプ撤収の日

タクティクス

志小田美弘

登攀計画

1　ルートについて

(1)　栃木隊西稜ルートとする。

原則として全員登頂を目指す。しかし、絶対ではないことを隊員全員が理解し、個人の順応レベルに応じた管理を了承することを全員で確認する。

(2)　ルート工作について

①Ｃ１～Ｃ２間フィックス

②Ｃ２～Ｃ３間一部フィックス

③Ｃ２～Ｃ３間、Ｃ３～頂上までのヒドンクレバス、広い斜面でのルート確保用として蛍光の赤布を使用する。

④ソロでの行動はしない。

2　登山期間とキャンプ位置について

(1)　ＢＣ開き後の登山期間は23日間とする。

(2)　登山期間を３期に分ける。

①第１期　アプローチ～ＢＣ

・初期順化を丁寧にしてＢＣ入りする。

・ラサで１日順化行動を行う（高度4,500ｍを獲得）。

・ヤムドク湖周辺で順化行動を３日間行う（高度5,000ｍを獲得）。

・車両終了地点からＢＣまでは、ヤクを使用する。

②第２期　ＢＣ～Ｃ３

・Ｃ２を２回以上トレースし、Ｃ２に宿泊。

・Ｃ２～Ｃ３間をトレース。

③第３期　ＢＣ休養～アタック

・ＢＣでの２日間の休養の後、アタック。

(3)　キャンプについて

・ＢＣ（4,900ｍ）

・Ｃ１（5,700ｍ）

・Ｃ２（6,400ｍ）

・Ｃ３（6,700ｍ）

3　パーティー編成について

(1)　４パーティー編成とする。（Ａ４・Ｂ３・Ｃ３・Ｄ３）　13名

・ルート工作・荷上げ・休養（キャンプ整備）

(2)　パーティーリーダー

・パーティーメンバー、パーティーリーダーは現地で決定し、編成は状況を考慮しながら適宜変更する。

4　アタックについて

(1)　原則として、２次アタックまで考える。

(2)　アタック時は、Ｃ２でサポート体制をとる。

登攀活動

1　ルートついて

(1)　栃木隊西稜ルート

・計画通り西稜をルートとした。Ｃ１までガレ場の急登が続く。もう少しＣ１の位置が低ければとも思うが、水の確保のため雪線である5,800ｍ地点になることはやむを得ない。初期の段階では６～７時間以上を要していたが、順化後は速い者で４時間ちょっとで到達するようになった。

・Ｃ１Ｃ２間に最大傾斜60度程度の壁が11ピッチ程出てくるが、技術的に大きな問題はない。むしろ、モンスーン期であり、天候が不順なことが多く、Ｃ２からＣ３、そしてＣ３から山頂までの広い斜面で視界を失うことの方がやっかいである。

赤布をこまめに打って進んだ。山頂直下の斜面では膝程度のラッセルを強いられ、難儀した。

・Ｃ２からＣ３間は稜線から右にトラバース気味に進む。懸垂氷河やクレバスが散見されるが、見た目ほど悪くはない。

・北西稜ルートも未踏のルートとして検討に値する。水の確保という点で、西稜と同様にガレ場が続くので、Ｃ１の位置が問題としてあげられるが、技術的な問題は大きくはない。

(2)　ルート工作について

・Ｃ１上部の壁に11ピッチをフィックスした。頂稜からＣ２手前のピークまでも東面が切れており、

西面もベースキャンプ上の懸垂氷河まで落ちる斜面となっているため、帰路の大事をとって9ピッチ程フィックスした。

・C2から上部はコンテを基本として、赤布を打ちながら、タイトロープとした。

・ルート工作隊については、適宜メンバーを入れ替えてと考えていたが、工作の慣れやスピードの問題、序盤に不調者が多かったこともあり、ほぼ固定したメンバーでの行動となった点はやむを得ないと考えている。

2　登山期間とキャンプ位置について

(1)　登山期間と順化について

・23日間としたが、この時期天候が不順であり、降雪での停滞、不調者の搬送などで時間切れぎりぎりの第2次アタックとなった。

・アプローチ期のラサ～BC間の順化を丁寧に行うとして、ラサの裏山で1日順化行動を行った。この頃はホテルの階段の上り下りも辛かった。さらにヤムドク湖を越えたランカーズ村に招待所があり、ここを基地として高所順化行動を3日間（うち1日はレスト）行った。招待所からほど近い所（車で5分、歩いても30分程度）に5,000m近い裏山があり、ここを利用した。

・しかし、この初期の段階から計画の意に反して、発熱・下痢・食欲不振などの初期症状が強めに出る隊員が続いた。ベースキャンプでの検討や他の隊員の話を総合すると順化計画や高度のためだけでなく、食べ物の影響も相当あったのではと思われる点がある。また、初期の軽い症状の段階での無理な行動の結果、症状を重くした点も反省として挙げられる。飛田隊員は4度に渡ってラサを往復するという離れ業で、ラサでの渉外なども含めて大変な働きを引き受けて頂いた。

・短い登山期間ということで、どうしても戦線からの離脱を躊躇しがちになるし、復帰を急いでしまう点は否めない。しかし、結果的にはそのことは状況の好転をもたらさない。序盤に不調で隊を離脱した隊員が、ゆっくりとしたローテーションの中での行動の結果、最終的に登頂にこぎつけたことは、個人のリズムの問題だけでなく、短期間の遠征ゆえの問題点として指摘されるのではないか。

(2)　キャンプについて

・ほぼ当初計画通り、C1（5,800m）、C2（6,400m）、C3（6,500m）とした。

・BCも予定通り、栃木隊がABCとした4,850m地点とした。車両最終地点のマヨン村近くからヤクで1時間程度であり、C1への取り付きも近く、水場にも恵まれた好適地である。草花も豊富でブルーポピーも見られた。

・降雪による停滞、不調者の搬送などのため終盤に向けて、日程がかなりひっ迫した。アタック体制を検討する段になり、C3の設置をめぐって、隊長と登攀隊長、飛田隊員との間で当初意見の調整に時間を要した。要約すれば、計画通りC3まで設置してアタック体制とするか、否かである。C3については、計画の段階でC2とC3の高度差は少ないことから、順化を問題としてではなく、C2から頂上までの距離の問題としての設置という考え方は確認されていた。

最終的には、C2を設置し、その上部の偵察を終えた段階でアタック体制として、C3は1次隊がアタックの中で設置することとした。視界不良のルート工作の中でのダブルボッカという厳しい状況となったが、1次隊員の奮闘で無事に建設された。

3　パーティー編成について

・4パーティー編成（A隊4人・B・C・D隊各3人）

・順化の遅れやラサでの治療などがあり、13名が行動するということはなかった。高所登山を考えるならば、全員が順調に行動するということはむしろまれであろう。ただ、A隊とB隊を行き来した高橋などは大変であったろうと思う。

4　テイクイン・テイクアウトについて

・BCでのゴミは燃えるものは、持参の一斗缶の焼却炉で焼却した。焼却灰は地中に埋め、燃え残りのアルミホイル状のようなものはすべて拾い集め、ラサまで降ろした。（登山協会に処理を依頼）缶・瓶などは潰せるものは潰し、同様にラサに降ろした。

・ＢＣでのトイレは、隊員用２ヵ所、女性連絡官用１ヵ所を穴を掘って設置し、撤収時に埋設した。トイレットペーパーは箱を設置して集めた後、ゴミと一緒に焼却処分した。
・上部キャンプのゴミは下る隊員がその都度こまめに降ろすことを心がけた。
・フィックスロープについては極力回収したが、Ｃ１上の11ピッチとＣ２までの５ピッチは残置となり、完全なテイクアウトとはならなかった。
・ルート工作用の赤布は、布地部分をすべて回収したがポール部分（竹）は倒して埋めてくるにとどまった。
・ＢＣに近くの集落から毎日のようにチベット人の訪問があった。行動食などを子どもに与えることも度々あったが、その際にも包み紙をはずして与えるなどの気遣いをしていた隊員がいたが、大切な点だと思う。ゴミの処理という観念が希薄な彼らに善意でものを与える際にはやはり注意すべき点である。彼らは瓶などの容器も大変欲しがり、また上手に再利用もするが、ラベルをはずしてから与えるなどの配慮が必要であるし、基本的にはやはり、持ち帰るべきであろう。

食　　糧

川崎　浩史

1　順応トレ（３日間）

1）計　　画

体調よくＢＣ入りするため、現地食材を使った和食とする。

朝：現地米、副食（のり、乾燥納豆、佃煮、鮭缶）、みそ汁

昼：ラーメン、そば、やきそば

夕：現地米、カレー、五目飯、すし、その他適当にアレンジ

2）結　　果

ランカーズでは招待所泊まりとなりすべて外食となる（やきそばのみ使用）。

3）反　　省

計画段階からの下調べ不足であった。食材費、輸送費を無駄に使ってしまった。

2　Ｂ Ｃ 食

1）計　　画

数量を登山期間の３分の１とする。

朝：現地米、のり、佃煮、鮭缶、梅干し、お茶漬のり、みそ汁

昼：ラーメン、焼きそば、そば、ひやむぎ、冷やし中華

夕：現地食材を使った中華、和食（コックを頼む）

他：プリン、ゼリー、フルーチェ、お好み焼、汁粉、等デザート

2）結　　果

朝：前日の残ったごはんをおかゆにすることがほとんどで、副食もよく使用してほぼ計画通りであった。

昼：そば、ひやむぎ、スパゲティなど圧力釜使用でまあまあのできばえだった。その他、冷やし中華、やきそばもよく使用した。

夕：ほとんどが中華料理。ひつじを２回つぶしての焼き肉料理や餃子、マーボー豆腐（乾燥豆腐使用）など、中国人スタッフが腕をふるって調理してくれて和食の出る幕は少なかった。

他：乾燥豆腐（マーボー、みそ汁）、乾燥肉（野菜炒め）、乾燥油げ（みそ汁、煮物）、デザート類は好評であった。

3）反　　省

登山期間初期に不調者が多く、ＢＣ滞在のべ人数がかなり減ったこともあり、かなりの食材（特に麺類）が余ってしまった。

夕食の和食は調理料くらいあれば特に必要なかった。

3　高 所 食

1）計　　画

朝：ラーメン　餅、そば　餅、カレーうどん

餅（1人1袋）の3パターン

昼：レーション、C1はデザートとして焼きそば

夕：アルファ米（120g）と、レトルトカレー、五目飯、寿司太郎、マーボー春雨、鮭缶（4人で1缶）、みそ汁の4パターン

C3でのアタック時はジフィーズすき焼き

2）結　果

高所キャンプののべ滞在人数が計画より大幅に減ったことや食欲減退のため、かなりの食糧が余った。

朝食は麺類だけだとあきる。

3）反　省

隊員の年齢層が多少高いことを考慮して、1食における絶対量を2割少なくすべきであった。

全体的に食糧計画を反省すると、すべてにおいて余った食糧が多過ぎたということに尽きる。私もHAJの遠征や中国は今回が初めてということもあって、ひんしゅくを買いたくない一心であれもこれもと食品を揃え過ぎ、余計な輸送費を使ってしまった。

実際、北京や成都でほとんどの食品が揃うことや、われわれの舌が中華料理になれていることなどから、お金をかけずに中国登山をするなら最低限の日本食（高所食くらい）を日本で揃えるだけで充分だと思う。

行　動　食

鮫川　太一

まず行動食選定にあたっては軽量化の中にも高カロリー・高栄養食だけでなく、食べておいしく胃袋に満足感を持てるもので、食べて飽きないようにするために次の4つのサンプルを240食分作った。

青　色	200g
カロリーメイト	40g
シシャモ浜焼（真空パック）	40g
セサミクランチ（2個）	10g
かりんとう	30g
一口ゼリー（1個）	15g
ベビーサラミ	15g
干あんず	40g
飴A（3個）	10g

赤　色	200g
カロリーメイト	40g
イワシ浜焼	40g
甘納豆	30g
チョコレート	30g
ベビーチーズ	20g
一口ゼリー（2個）	30g
飴B	10g

緑　色	200g
ビスケット（7枚）	70g
シシャモ浜焼	40g
一口ヨウカン	30g
チーズたら	20g
チョコレート	30g
アーモンド	10g

白　色	200g
ビスケット	70g
シシャモ浜焼	40g
干あんず	40g
ミルクケーキ	10g
セサミクランチ（2個）	10g
QBチーズ	20g
酢昆布	10g

また事務所で使用可能な残り品を高所順応用に52食分（4日分）作った。しかし輸送の段階でビスケットの形が崩れ、酢昆布のパックがうまく密封されずカビてしまい、味も落ちていた。

反省点は当然のことであるが梱包輸送に耐えられる食品を選ぶ。さらに湿気に弱いものは単品で

小袋に入っているものを見つけるべきであった。これもあまり小袋が多すぎるとゴミ焼却に手間がかかるので、そのあたりのかねあいが難しい。いっそうのこと輸送コスト等の経費節減も兼ねて、時間の余裕さえあれば、現地調達を考えることもできる。現地の食品も今では良くなっていると思う。

袋の中身の評判は各人によって好みは異なるが、「ごまかし」という名のセサミクランチ、チーズたら、ミルクケーキ、シシャモ浜焼、一口ゼリーなどはおおかた味もカロリーも良かったと思う。

今回の遠征で行動食が70食以上残ってしまい処分に苦慮した。主たる原因として途中5名もの隊員が荷上げ、アタックから離脱したせいもあるがそれだけではない。BCから上部に登らない休息日は体調、天候等でかなりの日数になる。それを考慮に入れもう少し緻密に計算すべきと思った。

装　　備

高橋　敏雄

1　担　　当：共同装備（滝田、高橋）
　　：個人装備（志小田）

2　装 備 表

3　共同装備使用状況および反省点

幕 営 用

・新規購入エスパース（4、5人用）3張りをアナカンで送った以外は、ラサデポ品で調達した。デポリストに記載されているテント一式という項目にフライ等も含まれていると理解し、そのため高所キャンプ用エスパース（4、5人用）フライが3張り分足りずブルーシートの代用を急遽考えた。幸いにもタクティクスの変更等でブルーシートのフライ代用には至らなかった。しかし、雷まじりの降雪が頻繁にあり、改めて事前準備の大切さを知る。

・隊員用ベーステントは居住性が良く、問題はないが、あえて注意点を上げれば、降雪や風には大変弱く、湿雪の重量によりポールの破損が生じた。荒天時における隊員の迅速な対応が迫られた。

・食事用メステントについてはチベット登山協会から借用した。居住性および耐風、防水性に優れ快適であった。

・デポ用品のツェルトはテント並の重量および容積があり一考を要したい。

火 器 類

・ベースはプロパンを使用し、上部テントはEPIガスを使用した。EPIヘッドはC1で3個、C2で3個使用。また、ガスの使用状況は1日当たり1キャンプ約1.8本であった。未使用のEPIヘッド、ガスは予備を含めベースに多数あり、当然のことながら余計な物は上部に絶対上げてはならないことを荷下げにおいて痛感させられた。

・EPIランタンおよびローソクはベースのみで使用。上部キャンプにおいてはヘッドランプで充分である。

登攀用具

・P.Pロープ、スノーバーは適量であったと思われる。アイスハーケンは使用せず、ロックハーケンは三角岩にて使用。

・標識用赤布はC1～C2～山頂間べた張りをした。持参した本数については異論も有ろうが、ぎりぎり間に合ったと思う。

医 療 具

・ガモフバッグの使用状況については「登山活動記録」の8月2日を参照。

・上部キャンプに上げたO_2パックは幸いにも使用せずに済む。

・O_2ボンベはランカーズにて肺水腫の連絡官に使用。

炊事用具

・圧力釜はベースおよびC1において使用。C1への荷上げは労力を要するが、減退気味の食欲を維持するためにも必要であった。その他、数多くの炊事道具はとくに問題がなく、一覧を参照願いたい。

そ の 他

・体調不良によるロールペーパーの消費が意外と多く、途中追加購入した。

・トランシーバー（ハンディー機）はアンテナの性能により送受信状態に差が発生。純正よりは、別売の高性能アンテナ使用が抜群に感度の良いことを立証した。

・ベース用アンテナにダイポールアンテナを使用。大変感度よし。

装 備 計 画

'97. 4／9

	品　　名	数 量	B C	C 1	C 2	C 3	流動	単 重	総 量	調 達
幕営具	メステント	1	1							ラサ
	家　型　　7人用　　一式	3	3							〃
	ドーム型　6　〃　〃	1	1							〃
	〃　　4～5〃　〃	2	2							〃
	エスパース　2　〃　〃	1	1						2.80	〃
	エスパース　4～5〃　一式	8		3	3	2		4.83	38.6	ラサ5、J3
	ツェルト	4					4	0.70	2.80	ラサ
	スノースコップ	4		2	1	1		1.10	4.40	〃
	銀マット	16		6	6	4		0.2	3.2	J
	竹ペグ（12本×8張×30cm）	100		36	36	24		0.02	17.20	J
	ペフマット	20	20					0.6	12.0	ラサ
	ハイピーシート	4	4					2.25	9.0	〃
	（5×5＝1、3.5×3.5＝3）									
	剣スコップ	1	1					3.0	3.0	〃
	張り網（ナイロン 3mm×20m）	1	1							〃
	〃（P.P 6mm×30m）	1	1						0.2	J
	雪ブラシ	3			2	1				ラサ
	予備ポール	1組	1							〃
火気類	ガステーブル	3	3							ラサ
	（ホース、調整器）									
	プロパンボンベ10kg	3	3					≒24	≒72	〃
	（順応キャンプ、BC用、1.0K/日）									
	ＥＰＩガスヘッド	12	4	3	3	2		0.46	5.52	〃
	ＥＰＩカートリッジ	73	20	27	20	6		0.4	29.2	J
	ＥＰＩランタン	4	4					0.27	1.08	ラサ
	ローソク	45	10	18	13	4		0.1	4.5	〃
	石　油（含 ゴミ焼却）	20ℓ	20ℓ							〃
	ポリ容器（20ℓ）	1	〃							〃
	コンロ台（30cm×30cm）	10		5	3	2				〃
	ライター	52	32	10	5	5		0.02	1.04	J
	メ　タ（含 ゴミ焼却 20本/ケース）	3ケース	1ケース	1	1			0.1	0.3	J
	ローソク立（針金 0.5m）	15	7	3	3	2		0.03	0.45	ラサ
登攀具	P.Pロープ（8φ×50m）	30＋α						1.55	31.0	J
	6φ 細引	50m							2.0	ラサ
	スノーバー（60cm）	25						0.25	6.25	J
	アイスバイル	3					3	1.2	3.6	J
	竹竿（150cm）	100						0.15	15.0	〃
	赤布	100								〃
	アイスハーケン	10						0.2	2.0	ラサ
	ロックハーケン	5							0.5	J
	カラビナ	10						0.7	7.0	ラサ

	品　　名	数 量	B C	C 1	C 2	C 3	流動	単 重	総 量	調 達
医	ガモフバッグ	1	1							J
	O_2ボンベ	2	2							ラサ
	レギュレーター	2	2							〃
	マスク	2	2							〃
療	調整スパナ	1	1							〃
	O_2パック　ホルダー	6		2	2	2		0.83	4.94	J
	キャンドル	12		4	4	4		0.80	9.6	〃
具	マスク	6		2	2	2		0.3	1.8	〃
	パルスオキシメーター	1	1							ラサ
	圧力鍋（6 ℓ）	5	3	2				2.1	10.5	ラサ
炊	コッヘルセット（φ20cm　4人用）	8		3	3	2		1.5	12.0	〃
	（φ25cm　6人用）	2	2					2.0	4.0	〃
	大　鍋（40cm×20cm）	1	1							〃
事	中華鍋（40cm）	1	1							〃
	平　鍋（40cm×5 cm）	1	1							〃
	皿　（20cm）	16	16					0.15	2.4	〃
用	フライパン	3	3					0.4	1.2	〃
	カップ	16	16							〃
	食　器（深　5 cm）	16	16							〃
具	スプーン、フォークセット	16	16							ラサ
	お　玉	3	3							〃
	包　丁	3	3							〃
	まな板	3	3							〃
	たわし、スポンジ	3	3							〃
	フライ返し	3	3							〃
	しゃもじ	3	3							〃
	茶こし	3	3							〃
	缶切り、栓抜き	4	2	1	1					〃
	箸	20	20							〃
	洗面器	3	3							ラサ
	バケツ	3	3							〃
	やかん	1	1							〃
	魔法瓶	4	4							〃
	ざ　る	2	2							〃
	ボール	2	2							〃
	タッパー（セット）	2	2							〃
	焼き網	1	1							〃
	ラップ	2	2					0.2	0.4	J
	アルミホイル	2	2					0.2	0.4	〃
	楊　枝	1	1					0.1	0.1	ラサ
	キッチンタオル	3	3					0.3	0.9	J
	水用ポリタンク10 ℓ（折り畳み式）	1	1					0.4	0.4	ラサ
	2 ℓ	4		2	2			0.1	0.4	〃
	ロールペーパー	60	21	13	10	3	13	0.15	9.0	J
	中性洗剤	2	2							ラサ
	石　鹸	5	5							〃
	洗濯洗剤	0.5^{K}	0.5^{K}							〃
	タオル（雑巾、台拭き用）	13	6	3	3	1		0.1	1.3	J
	ほうき、ちりとり	1	1							ラサ

	品　　名	数 量	B C	C 1	C 2	C 3	流動	単 重	総 量	調 達
	雪　袋（黒）	10		4	4	2			0.5	J
	ひしゃく	1	1							ラサ
そ	高度計	3					3	0.15	0.45	J
	トランシーバー	6	2				4	1.3	7.8	〃
	雪温度計	3	1	1	1					〃
	ラジカセ	1	1							〃
の	ラジオ（短波用）	1	1							〃
	懐中電灯	2	2							ラサ
	電　池 単Ⅰ（ラジカセ、懐中電灯用）	30	30							〃
他	単Ⅱ									
	単Ⅲ（トランシーバー用）	100							2.5	J
	ペチャカン（缶をつぶす道具）	1	1							ラサ
Ⅰ	一斗缶	2	2						2.5	J
	火　箸	2	2							ラサ
	ゴミ袋　大	5	3	1	1				1.0	J
	小	40	10	10	5	3	13		3.0	〃
	バネ秤	1	1							ラサ
	ガムテープ	5	5					0.5	2.5	J
	ビニールテープ	3	3							〃
	P.Pバンド	50m	50m							ラサ
	P.Pストッパー	30	30							〃
	電　卓	1	1						0.3	J
	糊	1	1							ラサ
	筆記用具（ノート、ペン）	5	5						1.0	J
	ビニール袋 大（梱包用）	10	10						1.0	〃
	無線用ポール（伸縮バー）	1	1							〃
	修理用具	一式	一式							ラサ
	予備アイゼン	1	1							ラサ
そ	ピッケル	1	1							〃
	ＢＣ用シュラフ									〃
の	娯楽用品（トランプ、花札、サイコロ等）									〃
	マジック（太、細、色別）	3						0.02	0.06	ラサ
他	封　筒									〃
	マーカー（太、細）	3						0.01	0.03	〃
Ⅱ	ボールペン	10						0.01	0.1	〃
	ＨＡＪ旗	1								〃
	双眼鏡	1								〃
	水シャワー	1	1							J
	定規	1	1							ラサ

1）国内持ち出し装備を少なくするため、極力デポおよびクーラカンリⅡ隊の物を使用する。
2）クーラ隊は5月中頃にラサに下りてくる予定です。クーラ隊のデポ装備を至急FAXで送ってもらい、ニンチン隊が使う不足品を調達する。（取り敢えずＪ調達品は梱包日までに準備しておく。）
3）幕営具、登攀具、生活用具等出来るだけ梱包日の５／24迄に集める。残った装備は出発当日機内預けで選ぶ。
4）計画段階での装備の国内持ち出しの総重量はおよそ150kg前後になると思われる。
5）全員が隊に供出する装備として、ライター４個　タオル１枚。
6）隊に個人装備の貸借をお願いしている方、また調達をお願いしている方には梱包日迄に準備願います。また出せる装備があれば供出願います。
7）ラサ はラサでの調達品（購入品）であるが、デポ品と調整する。

国内調達リスト

品　　名	数　量	品　　名	数　量
エスパース　4～5人用	3	ロールペーパー	60
銀マット	14	タオル	13
張り網(P.P 6 φ×30m)	1	雪　袋（黒）	10
竹ペグ	100		
		高度計	3
ＥＰＩカートリッジ	73	トランシーバー	6
メタ	3ケース	雪温度計	3
ガスライター	52	ラジカセ	1
		ラジオ（短波用）	1
P.P.ロープ(8 φ×50m)	20＋α	ゴミ袋　大	5
スノーバー	25	小	40
アイスバイル	5	ガムテープ	5
アイスハーケン(60cm)	10	ビニールテープ	3
ロックハーケン	5	電　卓	1
竹　竿（150cm）	100	ビニール袋 大（梱包用）	5
赤　布	100	無線用ポール（伸縮バー）	1
O_2パック　ホルダー	6	水シャワー	1
キャンドル	12	単Ⅲ電池	100
マスク	6	一斗缶	2
ガモフバッグ	1	筆記用具（ノート、ペン）	5
		マジックインク	3
アルミホイル	2	ボールペン	10
ラップ	2		
キッチンタオル	3	修理用具	

ラサ調達リスト

品　　名	数　量	品　　名	数　量
メステント	1	箸	20
剣スコップ	1		
雪ブラシ	3	バケツ	3
		魔法瓶	4
プロパンガス 10kg	3	ざ　る	2
ローソク	45	ボール	2
石　油	20ℓ	タッパーセット	2
ポリ容器（石油用 20ℓ）	1	焼き網	1
		楊　枝	1
カップ	16	中性洗剤	2
スプーン、フォークセット	16	電　池 単Ⅰ	30
まな板	2	単Ⅱ	
たわし、スポンジ	3	糊	1
フライ返し	2		
しゃもじ	2	ほうき、ちりとり	1
茶こし	2	ひしゃく	1
缶切り、栓抜き	3	洗濯洗剤	500 g

個人装備リスト

チェック	品　　名	数	重量	品　　名	数	重量
	ピッケル	1	1.10	テルモス	1	
	アイゼン(紐絞めは予備紐も)	1	0.7	磁　石	1	
	ストック	1	0.4	タオル	2	
	ハーネス	1	0.6	食器（高所用）	1	
	ユマール	1	0.35	リップクリーム	1	
	下降器	1	0.15	日焼け止めクリーム	1	
	カラビナ(含、安全環付き1ケ)	4	0.32			
	シュリンゲ	3	0.15	体温計	1	
				個装袋　大	1	
	登山靴	1	2.4	持病薬		
	ザック	1	1.5	水　筒	1 ℓ	
	サブザック	1		洗濯バサミ	5	
	オーバーヤッケ上下	1	1.5	軍　手	4	
	オーバーミトン	1	0.1			
	ロングスパッツ	1	0.3	パンツ		
	パイルジャケット	1	0.5	下　着		
	〃　　パンツ	1	0.5	帽　子		
				運動靴		
	高所帽、目出帽	1		サンダル		
	毛手袋（厚、薄）	各2		ポロシャツ		
	毛靴下（　〃　）	〃		ジャージ上下		
	アンダーウエアー上下	1	0.8			
	スカーフ、バンダナ	2		計画書		
	セーター	1		筆記用具		
	サングラス	1		パスポート		
				洗面用具		
	シュラフ	1		手　鏡		
	シュラフカバー	1		爪きり		
	テントシューズ	1		カメラ		
	テントマット	1		フィルム		
	ヘッドランプ（予備電池）	1		本		
	雨　具	1		ミュージックテープ		
				ウエストバック		
	傘	1		金		
	ナイフ	1		タオル	3	
	ライター	5				

1）個人装備は日本の冬山を基準に各自の判断で準備して下さい。
2）梱包は中プラパール1個、15kgまでになっております。
3）輸送品は梱包日に持参して下さい。

輸送・梱包

森山　安次

5月24日に、アナカン輸送する物資の梱包作業を東京で実施しました。

プラパールの数は大が12、小10、その他1で、総重量は約620kgでした。

共同装備関係がプラパール大3、その他1で約105kg、食糧関係がプラパール大2、小10で約321kg、13人分の個人装備がプラパール大7で約194kgでした。

われわれが出発時に持っていった共同装備、食糧個人装備の重量は把握していないが、メンバーのザックに収まった量でした。

ラサではデポしてある共同装備を12個の大プラパールに収めると共にペフマット3巻き（22枚）、標識の竹竿1束、ラサで購入した野菜類をズタ袋13袋に梱包しました。

ＢＣで使用するプロパンガスボンベ5、医療用の酸素ボンベ3、ＢＣ食堂用の大テント（チベット登山協会より借用）1と中国スタッフの荷物が10個となり、以上の荷物をトラックでＢＣの手前1時間半の所まで輸送しました。

トラックの最終到達地点からＢＣまではヤクで荷上げをしました（ヤクの数は20頭でしたが内14頭は2回荷上げをしました）。

今回、トラックに乗せる物資で反省する点が2点ありました。

高所順応訓練のため、ランカーズ（4,400ｍ）の招待所に2泊滞在することになり、高所順応訓練日の昼食（行動食）は用意してあったが、休養日の昼食用の食糧と炊事道具はトラックに積んであった点。

ランカーズで医療用酸素ボンベを使用する病人が発生した時もやはり医療用酸素ボンベ一式はトラックの荷台に積んであった点である。

自動車移動では医療用器具（酸素）は隊員の乗車する自動車に積んでおくべきであった。

登山終了後、ＢＣからラサに持ち帰った空のプラパール箱が大小15個あったことは、登山開始前のラサでの再梱包でスリム化すべきであった。

通　　信

脇田　康治

使用機器

＊トランシーバー

ＹＡＥＳＵ製	2Ｗ	3台
ＳＴＡＮＤＡＲＤ製	5Ｗ	2台
〃	2Ｗ	1台

各パーティに1台（計4台）、ＢＣに1台、予備1台で、総計6台を隊員より調達したが1台は当山活動前にすでに故障していた。使用周波数は、144MHz。

＊アンテナ

ＢＣ：シンプルナＧＰ型アンテナ（ノンラジアル）を設置した（115㎝　利得3.5dB）。付属機器：支柱（ポール2ｍ×3）、張綱30ｍ、同軸ケーブル10ｍ、同軸接栓×2、ＢＮＣ用変換コネクター。

上部：付属のアンテナの他、携帯用ホイップアンテナ（ロッド・アンテナ、93㎝　利得3.0dB）を2本用意したが。1本は使用者のミスで登山活動の前に破損させた。幸い隊員が1本持参しており計画どおり2本使用できた。

＊電　　池

トランシーバー1台につき単3アルカリ電池6本使用、概ね1週間で交換するとして5台（予備含まず）×6本×3週間＋αとして100本用意したが、余ってラジカセ等にも借用したようである。

交信状況

ＢＣからはＣ３を除き、Ｃ１、Ｃ２及び頂上へはダイレクトで交信可能であった。各キャンプ間の交信は、Ｃ１～Ｃ２間はＣ１から少し移動することによって可能、その他はキャンプを飛ばすことはなかったので問題はなかったがＣ１～Ｃ３間は不可能と思われる。

特筆すべきはＢＣより下部への交信であった。ご存じのように今回は高所順応の段階からラサへの下山者が相次いだ。ＢＣから公路までは一山迂回して降りるわけだがその場合も公路で車が拾えるまで中継なしに交信することができた。

事故が起きた場合の、ＢＣの強力な無線基地（アンテナ）の必要性を実感したのである。

医　　療

石川　龍彦

今回の遠征には医師が同行しないので、医薬品を持参し、応急処置をする程度のことしかできない。持参する医薬品の種類と量を決めなければならないが、医療係を担当するのは初めての経験なので、まずは過去の遠征隊の報告書に目を通すことからはじめた。

ニンチンカンサはラサから比較的近いので、病人や怪我人が出てもＢＣから丸１日あればラサの病院まで運ぶことが可能と判断し、必要最小限の医薬品に留めることにした。最終的には大阪で交楽薬店を経営される樋上嘉秀氏にそろえていただき、７月５日に受け取った。持参したものは別表の通りであるが、量としては小さなダンボール箱に十分収まる程度のものであった（表１の使用頻度はＡが70～100％、Ｂが30～70％、Ｃが０～30％を表す）。

次に大きく体調を崩した者の経過を記す。

・趙連絡官：ランカーズで体調を崩し、肺水腫の疑いがあったので７月26日にラサに下り入院、29日退院。以後問題なし。

・石川隊員：ラサ到着直後から微熱がつづいたが、ランカーズで咳がひどくなり７月27日にラサに下り入院、30日退院。

・鮫川隊員：７月26日ランカーズで発熱。28日にラサへ下り入院、30日退院。

この３人はいずれも西蔵自治区人民医院心血管科に入院し急性高山反応と診断された。

・滝田隊員：７月31日から不調、夕方から下痢。８月１日さらに悪化したため一晩ガモフバッグに入れ８月２日にラサに下る。赤痢（アメーバー性？）と診断される。８月４日退院して復帰。

・森隊員：８月８日発熱。風邪の症状に近いが回復する様子がないので11日にラサに下る。入院せずにホテルに宿泊し西蔵軍区病院に通院する。14日に退院しＢＣに戻る。

・脇田隊員：７月28日のＢＣ入りより腹痛。８月３日より強い胃痛が始まり10日に下血。11日に森隊員とともにラサに下り通院するが登山続行は無理と診断され14日にラサを発ち帰国する。帰国後広島にて入院治療。1996年に患った出血性胃潰瘍の再発であった。

その他ランカーズやＢＣで程度の差こそあれ多くの隊員に滝田隊員と似た症状が見られた。大事には至らなかったが赤痢に感染していた可能性もある。多くの隊員が体調を崩した点では大きな課題が残った。

入院費等は中国登山協会が立て替え、後で送金する形となったが、小生の場合、２泊３日の入院治療費が日本円で約16万円となった。外国人は中国人の約６倍ということでこのような高額になるのだが、そのうち約80％が心電図の費用というのには驚いた（表２参照）。

最後に不調な隊員に付き添い何度もラサを往復してくれた飛田隊員には頭が下がる思いでいっぱいである。また小生が体調不良のとき医薬品の分配等の世話をしていただいた野口隊員にも感謝したい。

表１　医薬品および医療用具リスト

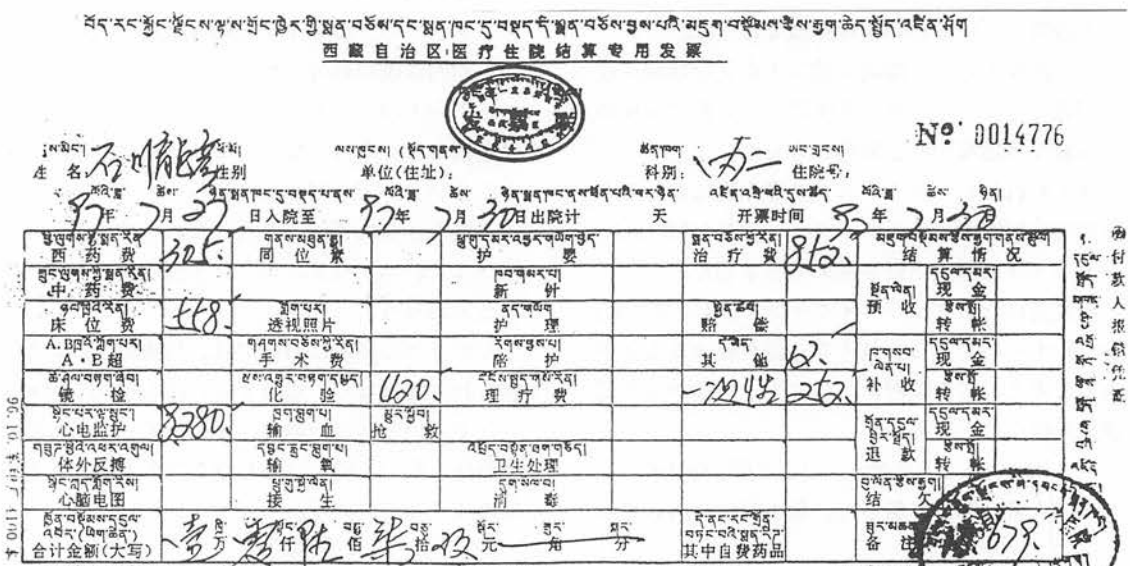
［1］医薬品

薬効	医薬品名	容量および数量	用法・用量／１日	効能・効果	備考	使用頻度
抗生物質	ケフラールカプセル	60カプセル	3～6カプセル・分3	インフルエンザ・肺炎		C
	セフゾン	20錠	1回2錠・2回	食中毒・化膿症		A
抗菌剤	クラビット	40錠	4錠・分2	尿路障害・尿道炎・膀胱炎		A
風邪薬	エスタック顆粒	48包	1日3包、毎食後	総合感冒薬		C
	パブロン咳止め	36包	1回1包・3回	鎮咳・去痰		B
	ビノック鼻炎カプセル	24カプセル	1回1カプセル・3回	鼻炎（鼻水・鼻づまり）		A
	ブロントローチ	32錠	頓用	喉の炎症・喉通		C
鎮痛解熱剤	イブA	96錠	1回2錠・3回	頭痛・咽喉通・歯痛 外傷後の疼痛 発熱・炎症の緩解 腰痛・筋肉痛・神経痛 打ち身、捻挫時腫脹緩解		C
	ロキソニン	60mg×30錠	1回2錠（頓用）			B
	ボンタール	50錠	1回2錠・3回			C
	セルボン500坐剤	25mg×10個	1回1～2個・1～2回			C
胃腸薬	オフト顆粒S	64包	1回3包・3回	総合胃腸薬		B
	ミヤリサン錠	330錠	1回3錠・3回	整腸	2瓶に分割する	B
	正露丸	400粒×1個	1回3粒・3回	下痢・軟便・虫歯	3瓶に分割する	A
	ブスコパン	10mg×50錠	1回1～2錠・3～5回	鎮痛鎮痙		B
	ガスター	20mg×26錠	1回1錠・朝夕食後2回	胃・十二指腸潰瘍		C
便秘薬	大正漢方便秘薬	100錠×1個	1～3錠・就寝前	便秘		A
止瀉薬	ロペミン	1mg×30カプセル	1～2カプセル・分1～2回	下痢		B
利尿剤	ダイアモックス	250mg×50錠	1～2錠（1日1回）	浮腫・高度障害	呼吸促進にも良い	A
	ラシックス	40mg×10錠	1～2錠（1日1回）	乏尿・高度障害		A
点眼剤	フラビタン点眼液	5mℓ×2本	数回	雪目		A
	ベノキシール	20mℓ×2本	数回	目の痛み		B
	スマリンサルファ	15mℓ×1本	数回	抗菌剤（結膜炎）		A
	市販目薬	13本	数回		各自で持参	A
ビタミン剤	ビタミネンゴールド	120錠×2個	1回2錠・1回			C
	コバE300	100カプセル	1回1カプセル・2～3回			C
抗ヒスタミン剤	アバピロン錠	20錠×1個	2錠・分2回	アレルギー症状		A
痔疾用剤	ヂナンコーハイ	2.5ｇ×10個	塗布と挿入兼用	痔の各症状		B
解毒剤	グルファミンC	20錠×1個	1錠	二日酔い・薬物中毒		A
睡眠剤	ソラナックス	0.4mg×18錠	3錠・分3回	精神不安		A
外用鎮痛剤	シップ薬	24枚		筋痛・打ち身・捻挫		C
	イタドリン液	20mℓ×2個				B
外用剤	ソルバミン	60mℓ×2本		傷口の消毒		B
	テラマイシン軟膏	5ｇ×2本		皮膚化膿		B
	メモ	30ｇ×2個		外傷治療・火傷	雪焼けによる口荒れ	B
	コルデールG軟膏	5ｇ×1本		湿疹・蕁麻疹		C
	ケナログ	2ｇ×1個		口内炎など口腔用		A
	キンカン	110mℓ×1本		虫刺され・痒み止め		A
	コルヂール軟膏	20ｇ×1本		しもやけ・あかぎれ		A

［2］医療用具

品　　名		数 量	用 途	使用頻度	品　　名	数 量	用 途	備 考	使用頻度
三角巾		1枚		A	綿棒	50本			B
ネット包帯	ロール2m	1本		A	ピンセット	2本			A
伸縮包帯		5本		A	ハサミ	2本			A
ガーゼ・1m		2枚		B	テーピングテープ	2巻			B
テープ	紙製	2本		A	体温計	1本			A
	布製	1本		A	血圧計	1台		デポ品あり	C
キズテープ		76枚		B	カット綿・50g	2袋			C

表2　病院の請求書


西藏自治区医疗住院结算专用发票

No. 0014776

姓名：石明能　性别　单位(住址)：　科别：内二　住院号：

97年7月27日入院至 97年7月30日出院计 天　开票时间 97年7月30

西药费	326.	输血费		护理费		治疗费	842.	结算情况	
中药费				新针				预收 现金	
床位费	448.	透视照片		护理		赔偿		预收 转帐	
A.B超		手术费		陪护		其他	62.	补收 现金	
化验		化验	620.	理疗费		-2244.	262.	补收 转帐	
心电监护	8280.	输血		抢救				退款 现金	
体外反搏		输氧		卫生处理				退款 转帐	
心脑电图		接生		消毒				结欠	
合计金额(大写)	壹万 仟 贰 佰 柒 拾 玖 元 角 分					其中自费药品		备注	679.

收款单位章(未盖章无效)　开票人：　复核人：　收款人：

说　明：1. 各类医疗、保健、卫生、防疫单位结算住院治疗费使用。

環　　境

加藤　和美

先日、テレビを見ていたら偶然チョモランマのＡＢＣの風景を「地球最高所にあるごみ捨て場」として紹介していたが、それはあまりにもひどい状態で強く印象に残っている。

世界各国の登山隊が残していったごみは、莫大なもので食料から注射器にいたるまで、あらゆる物が散乱していてさながらごみ捨て場の中にテントを設営しているという有り様であった。

この映像を見て、環境問題は人が住む地域だけの問題ではなくて今や、高所登山の分野でも極めて重要な問題なのだと実感しました。

さてわれわれニンチンカンサ登山隊においても環境面に配慮すべく「テイクイン、テイクアウト」をモットーに登山活動を進めてきました。

出発前においては「テイクイン、テイクアウト」をモットーとする以上各人の意識を高めることが大事と考え、ごみ問題について不十分ながら共通認識を持つことができた。

ＢＣ用には、ごみを焼く一斗缶２個、灯油40リットル、火箸、等を準備した。基本的にはＢＣでのごみは焼却し、Ｃ１以上の高所キャンプでのそれはＢＣまで下ろすことにする。

実際ＢＣにおいては、だいたい基本は守られたと思う。燃えるごみは２～３日おきに焼却し、残飯等のなま物は地面に大きな穴を掘って、埋めた。また、隊員の大便も地面に穴を掘って簡易便所を作り２カ所で用を足すようにした。使用したトイレットペーパーはトイレの横の紙箱に入れてもらい定期的に焼却処分した。

Ｃ１以上の高所キャンプにおいてはＢＣのように道具もなく余裕もないのでごみを捨てず持ち帰るぐらいしかできなかった。

一番大きな反省は、悪天のために登山活動に余裕がなく、フィックスロープを回収できなかったことであろう。

ヒマラヤの高所においては、日本のように物が腐るわけではなく、処分する方法も焼却や埋めることぐらいしかないので、とにかく、余分な物は持ち込まない、持ち込んだ物は持ち帰るのが最低限のルールだと思う。

ベースキャンプでのゴミ焼き

第３部　隊員紹介・紀行

隊員紹介
遠征を終えて
11年ぶりのチベット
楽しかったＢＣの生活
ラサへの４往復と高所順応
登山を終えて
途中下山、１人帰国の旅
ヒマラヤへのハードル
ニンチンカンサ登山隊に参加して
雑　　感
1997年　１年を振り返る
ニンチンカンサから帰って
走向山野
（対訳）

隊員紹介

1）住所　　2）勤務先
3）所属山岳会　　4）隊の役割
5）高所登山歴　（年齢、勤務先は出発時）

天城　敬彦［AMAGI Takahiko］
1947.5生　50歳
1）東京都新宿区
2）㈱有斐閣
4）隊長
5）1983年　インド、ヌン(7,135m)
1986年　中国、雪宝頂(5,588m)初登頂
1988年　中国、ゲニ(6,204m)初登頂
1990年　インド、サトパント(7,075m)登頂
1993年　中国、ムスターグ・アタ(7,546m)登頂

常に精力的に動く行動的な隊長であり、隊員の合意を大切にしながら、登攀活動を推進した。2次アタックでは、先頭に立ってラッセルし、2次隊を登頂に導いた。遠征序盤で不調者が続出し、心労はいかばかりであったか。登攀活動終了時の安堵した表情が印象に残る。料理の腕前もなかなかのもので、今回もBCで濁酒「天城大吟醸」を仕込み、隊員に振る舞った。奥様も隊長夫人として、準備期間の自宅の提供、成田への見送り、出迎えなど、今回の遠征でも支えていただいた。

志小田　美弘［SHIKODA Yoshihiro］
1959.1生　38歳
1）宮城県桃生郡
2］石巻市立門脇中学校
3］東北学院大学山岳会
4］登攀隊長、装備
5］1986年　中国、チョー・アウイ(7,354m)初登頂
1993年　中国、ムスターグ・アタ(7,546m)登頂

大学山岳部で鍛えた本格的な山屋である。今回、副隊長をおかなかったため、副隊長役も担い、加えて「事務局長」役までこなしてもらった。苦労も多かっただろうが本来の役割の登攀隊長としても常に前線をリードし、登頂に導いた。こよなく酒を愛し、豪快にして繊細。国に帰ればよく遊び熱心に働く、よき教師である。

野口　道雄［NOGUCHI Michio］

1936.9生　60歳

1）　千葉県佐倉市

2）　藤倉エネシス㈱

3）　東京白稜会

4）　環境

5）　1988年　ネパール、アンナプルナ・トレック

1991年　メキシコ、ポポカテペトル(5,452m)登頂

1994年　パキスタン、ライラ(6,986m)

最年長隊員だが、身ごなしも含めてすべてに若く、精神的にも肉体的にも見事に安定していた。名門、東京白稜会の現役会員で、登山中もテント生活においても細やかに気を配り、申し訳なくなるほどよく動く。海外勤務が多く旅慣れてもいるのであろう、小型のワープロを身近に置き、記録にも余念がない。登頂もなり、感謝の言葉を口にされておられたが、われわれこそ野口さんから多くのことを教えていただいた。

飛田　和夫［TOBITA Kazuo］

1946.1生　51歳

1）　埼玉県越谷市

2）　日本コムシス㈱

3）　同人パハール

4）　気象

5）　1975年　パキスタン偵察

1978年　インド、トリスル(7,120m)登頂

1981年　ネパール、ヤルン・カン(8,505m)登頂

1983年　インド、ヌン(7,135m)隊長

1984年　中国、ユイロン(5,596m)隊長

1985年　パキスタン、K2(8,611m)隊長1986年　ネパール、ゴーキョ・ピーク(5,483m)、中国、ギャラペリ(7,294m)隊長

1987年　中国、ゲニ(6,204m)隊長、パキスタン、K2偵察

1988年　中国、ゲニ隊長・初登頂、パキスタン、ガッシャーブルムⅡ(8,035m)隊長

1989年　アメリカ、マッキンリー(6,194m)捜索

1994年　中国、ムスターグ・アタ(7,546m)隊長・登頂

1995年　パキスタン、キンヤン・キッシュ(7,852m)隊長

1996年　パキスタン、キンヤン・キッシュ隊長

K2をはじめとして隊長経験が豊富であり、今回の遠征でも隊の重鎮として、頼りになる存在であった。不調者の付き添いとして4度ラサを往復した。持病の腰痛を抱え、自分の順化行動も不十分でありながら常にルートをリードし、1次アタックで登頂を果たしたのはさすがである。

最終の荷下げでC1にサポートとしておにぎり持参で現れ、空腹の荷下げ隊の隊員に大いに感謝された。経験に基づいた的確な判断で登頂に大いに貢献した。

森山　安次［MORIYAMA Yasuji］

1949.12生　47歳

1）　東京都杉並区

2）　㈱ダイワ

4）　輸送・梱包、食糧

5）　1985年　中国、クラウン(7,295m)

1987年　中国、ラプチェ・カン(7,367m)

1991年　中国、雪宝頂(5,588m)登頂

1993年　中国、ユイチュ(6,179m)

1994年　中国、ユイチュ(6,179m)登頂

過去5回のＨＡＪ遠征がすべて中国というベテラン。周囲に目を配り隊を支えたのは、このあたりの蓄積のたまものだろう。準備合宿の様子からは、飲み過ぎ注意と思っていたが、はたが案ずるまでもなく、自ら好きな酒もほどほどにして自己管理に心がけ、３度目の挑戦でついに7,000ｍの頂に立った。意外に（失礼！）物知りで「はかせ」の異名を与えられる。

脇田　康治［WAKITA Yasuji］

1950.9生　46歳

1）　広島県安芸郡

2）　広島中央郵便局

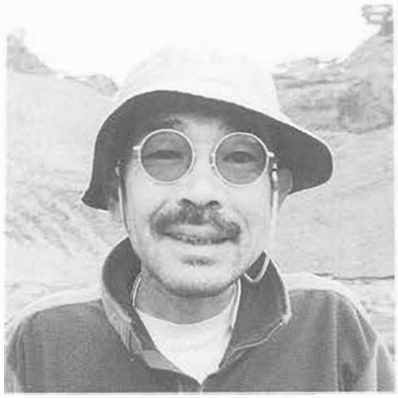
3）　広島修岳会

4）　通信

5）　1989年　ネパール、ランタン・トレック

1991年　アメリカ、マッキンリー(6,194m)

1993年　中国、ユイチュ(6,197m)登頂



酒もたばこもたしなみつつ、フルマラソンも３時間を切るという。通信担当で、普段は茶目っ気の多い人なのに、交信にでると「用件はそれだけか」などと、何か不機嫌なのではないかと思うくらいぶっきらぼうになる。しかしそれは国体で自衛隊と一緒に活動して体得したもので、必要なことがらだけを正確に伝えるきわめて合理的なものだった。胃潰瘍を再発させて一足先に一人で帰国した。完治させてまた挑戦してください。

鮫川太一［SAMEKAWA Taiichi］

1950.12生46歳

1) 茨城県日立市

2) 明秀学園日立高校

3) 小名浜山岳会

4) 食糧

5) 1985年ネパール、アンナプルナ・トレック

フルマラソン3時間を切る体力の持ち主。出発前に国内で山行をともにしたときは、「こんな速い人と一緒にいくのか」と思うほど強かったが、初期順化でつまずき、ラサの病院に下る。いったんは順調に復帰したが、捻挫などもあり登頂は断念した。初めてのヒマラヤ登山ということで戸惑いも多かったのであろう。隊長としては目配りが足りなかったと反省することが多い。しかし今回つかんだものは多いはず。次の機会に生かしていただきたい。

石川　龍彦［ISHIKAWA Tatsuhiko］

1952.2生45歳

1) 兵庫県宝塚市

2) エル・ドラド・インターナショナル

4) 医療

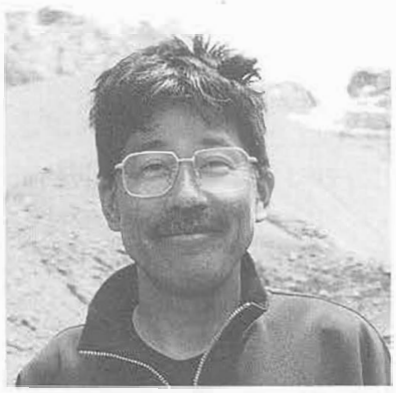
5) 1983年　旧ソ連、レーニン(7,134m)隊長・登頂

1985年　旧ソ連、コムニズム(7,495m)＆コルジェネフスカヤ(7,105m)隊長・登頂

1987年　アルゼンチン、アコンカグア(6,959m)

1989年　インド、ヌン（7,135m）

1996年　中国、ムスターグ・アタ(7,546m)隊長・登頂



登頂

高校の地学の教師から商売人に転身したユニークな経歴を持ち、独特なユーモラスな語り口で場を和ませてくれた。おそらく教員時代には、生徒から慕われていたことであろう。初期段階では不調で、ラサの病院に下ったが、復帰後は順調にこなし、ぎりぎりで登頂に間に合った。このあたりの辻褄の合わせ方は、豊富な経験がものをいったのであろう。

加藤　和美［KATO Kazumi］

1953.2生　44歳

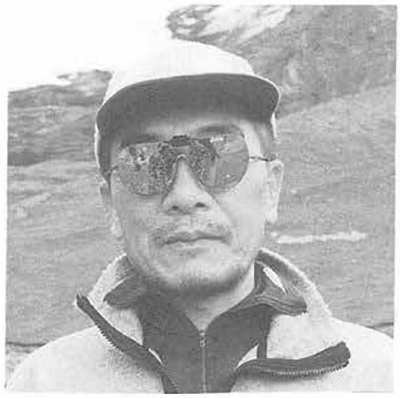
1）　愛知県尾西市

2）　稲沢東高校

3）　嶺山岳会

4）　環境

5）　1975年　ネパール、ジョムソン・トレック



初めての遠征であったが順化もよく体調は安定しており、ローテーションどおり１次隊で登頂した。まあマイペースの人なのだろう。ベースキャンプでは本格的なコーヒーをいれてくれていた。登山終了後、ラサ、成都、北京では熱心に観光に励んでいた。

滝田　収［TAKITA Osamu］

1957.3生　40歳

1）　福島県郡山市

2）　東邦興産㈱

3）　こまくさ山岳会

4）　環境、装備

5）　1988年　中国、ゲニ(6,204m)初登頂

1990年　インド、サトパント(7,075m)登頂

1992年　中国、ムスターグ・アタ(7,546m)

&クラウン(7,295m)

準備段階から合宿の手配等で積極的に働き、装備担当としても随所で細かな配慮をしていた。初期順化も順調にこなしたと思ったが、ＢＣ入り３日目から体調をくずし、ラサの病院へ下る（赤痢であった）。生来の気力・体力でいったんは順調に戦列に復帰したが、やはり順化が追いつかなかったのだろうか、残念ながらアタック目前のＣ３からＢＣに下ることとなった。

高橋　敏雄［TAKAHASHI Toshio］

1958.10生　38歳

1）　宮城県仙台市

2）　東北高校泉校舎

3)東北学院大学山岳会

4)装備

5)1986年　中国、チョー・アウイ(7,354m)初登頂

1993年　中国、ムスターグ・アタ(7,546m)登頂

1995年　パキスタン、ナンガ・パルバット

(8,126m)

気は優しくて力持ちが彼の代名詞。自己管理を慎重に順化を進めた。B隊のリーダーを務め、持ち前の馬力で強力に荷上げを推進した。周りへの気遣いをよくし、雑事にも率先して取り組み、皆に感謝された。1次アタックでは、その馬力をラッセルに発揮し、登頂を果たした。山をこよなく愛し、真摯に取り組む好男子である。登攀隊長の大学時代からの親友でもある。

川崎　浩史［KAWASAKI Hiroshi］

1964.1生　33歳

1）　埼玉県新座市

2）　㈲川崎外装管理

3）　わらじの仲間

4）　食糧

5）　1986年　インド、ヌン(7,135m)登頂

1987年　パキスタン、K2(8,611m)

1990年　インド、サトパント(7,075m)登頂

1992年　インド、テレイサガール(6,904m)隊長

国内で高所順化トレとして富士山に足繁く通い、遠征に備えた。その成果で初期順化の段階から順応抜群で、持ち前の体力を生かして、荷上げ、ルート工作に大いに力を発揮し、1次アタックで登頂した。大らかな性格の中に緻密さも持ち合わせており、食料係として国内の準備の段階から迅速かつ的確に隊務を進めた。豊富な職歴を持ち、ユニークな語りで遠征期間中、皆を楽しませた。今後の活動が期待される。

森　達弥［MORI Tatsuya］

1970.9生　26歳

1）　福島県須賀川市

2）（福）福音会　宇津峰十字の里

4）　記録、医療

5）　1988年　ネパール、メラ・ピーク(6,654m)登頂

　　1996年　ネパール、アンナプルナ・トレック

障害児（者）福祉施設で働く最年少隊員。前年暮れにはハンディキャップをもつ子供とともにネパールへトレッキングに行くなど、山や自然をフィールドにした活動も行い、将来もそうした活動を続けたいという。そのためなのだろうか、彼の自然や人に向ける視線はとても暖かい。登山終盤にさしかかって体調を崩し、いったんラサに下ったが、すぐに復帰してアタックを支えた。

趙玲玲（連絡官）

中国登山協会交流部の女性。通訳としての経験も豊富で、日本語のできる連絡官ということで大変助かった。自身も体調を崩し1度ラサに下ったが、以後2回も不調の隊員に飛田とともに付き添ってラサに下る。戻ってくる度におみやげを買ってきてくれて、最後に荷上げし、自ら調理してくれた鶏のもも肉は絶品だった。

張少宏（通訳）

趙玲玲さんとも面識のある、明るい現代青年で、学生時代には陸上の近代10種の中国チャンピオンだったという。いまはラフティングのインストラクターをやっているが、登山隊の連絡官の経験もあり、玲玲さんが不在の時は過不足なく連絡官役も務めた。病人続出の隊のピンチを何とか切り抜けることができたのは、この２人のコンビによるところが大きい。

黄彦（コック）

出身は四川省で、ラサに働きにきている。黙々とよく働き、気を利かせて油を控えた日本人向きの料理を作ってくれた。はじめのうちは日本人隊員が順番で日本食を作ったりもしたが、全くその必要がないことがわかり、後は全部お任せにしておいしくいただけた。控えめな、はにかんだような笑顔が印象に残る。

遠征を終えて

天城　敞彦

私のこれまでの遠征隊における役割は食糧担当が定位置で、食い物の心配だけしていればよかったのだが、今回初めて隊長を引き受けることになった。

遠征を終えたいまは、反省・悔い、安堵感、達成感を等分に感じているといったところだろうか。

反省・悔いは、不調者への対応に関するもので、その内の何例かは、本人から事前にいろいろな発信があったにもかかわらず、それを私が正しく受け止めていなかったためにことを大きくしてしまった。またその他の例でも私の反応や対応は、明らかにワンテンポずつ遅れていた。

高所順化の過程は誰でも苦しいもので、生理反応として起こる下痢や発熱は通過儀礼みたいなものだという発想がその主因だったと思う。それはそれで間違いではないのだが、そのなかで放っておいてよいものとそうでないものの見極めができていなかった。私自身の過去の遠征がうまくいきすぎていたためだろうか、成功率・登頂率の高さは、逆に言えば大きな困難に遭遇していないことだとも言えるのであり、経験の蓄積という点から見れば必ずしも望ましいことばかりではない。高所医学に対する理解不足もさることながら、危機感知能力ないし危機対応能力の不足を突きつけられたようで、このことが心の底に澱のように残っている。

初期順化に関しては、計画段階から丁寧に行うことを盛り込んで、ランカーズで３泊したのだが、これでも足りなかった。ただ期間に限度があるのだから、それ以上の日程は組みにくい。いま言えることは、今回のように高所順化が難しいことが事前に予測される山に入るときには、全員でのＢＣ入りを前提にせず、順化が順調なものと遅れて入るものに隊を２つに分けてＢＣ入りすることを計画段階から考えておくべきだったということがある。結果的にはそれでもラサへのＵターンはあったかもしれないが、少なくともゆとりという面では違っていただろう。

なお、遠征に先立ち基本的な医療知識の不足を補うべく、「わらじの仲間」が主催する救急医療の講習会に参加させていただいた。幸いにもそこで教わったことを使うことはなかったが、快く参加を許して下さったわらじの仲間のみなさんに、御礼申し上げたい。

反省点は細かく言えばほかにもいくつもあるが、アタック後の回収と撤収のタクティクスがおろそかであった。やはりアタックにばかり神経がいっていたのであろう。フィックスとスノーバーの残置、荷下げ時の混乱の原因となった。

ＨＡＪのサマーキャンプは、目的の第一に「登頂」を掲げてはいるが、基本的位置づけは「ヒマラヤを存分に楽しんでくる」ことで、「なんとしても山頂を落としてこなければならない」というプレッシャーがかからないよう配慮されている。しかしそうはいっても高い金を払い、貴重な時間を使って隊を組んでいる以上、１人でも多くが山頂を踏むことを目指さないわけにはいかない。まして今回の隊は経験豊かなものが多く、半数以上が7,000ｍを経験しており、内２名は8,000ｍを経験している。これだけのメンバーを預かりながら、これで登頂できなければ恥ずかしいという思いがないわけではなかった。

そんなこともあってか、安堵感・達成感はそれぞれの隊員が感じたものと質的には変わらないだろうが、これまでの遠征の中で、私は今回が一番強くそれを感じた。これが隊長冥利というものなのかもしれない。

隊長とはいえ、山森さんにはラサまで同行していただいたし、大先輩の飛田さんにはさまざまにサポートしていただいた。いわば保護者同伴であった。また隊員たちからは私の不慣れなところをよく補ってもらった。

一時は本当にどうなることかと思ったが、後遺症が残るような怪我や病気もなく、登頂もでき、無事遠征を終えることができた。

11年ぶりのチベット

志小田美弘

今から11年前の1986年、初めてヒマラヤへ遠征した。目標とした山は「チョー・アウイ峰」(7,354m)。ネパールとチベット自治区の国境にそびえ、まだ誰にも登られていない、いわゆる未踏峰であった。

10人の隊員で登山隊は構成された。隊員は宮城県の海外登山研究会のメンバーを核にして、岩手県の人間とで構成された。結果は、7,000mの未踏峰の全員登頂というこれ以上ないものであった。

2度目が1993年に参加した「ムスターグ・アタ峰」(7,546m)。かつて西遊記で知られる玄奘三蔵が仏典を求めてこの山の麓を通った。パキスタン、キルギス共和国とウイグル自治区の国境近くにあり、まさにユーラシア大陸のど真ん中を実感させる地である。

この隊も今回と同様、日本ヒマラヤ協会の登山隊であった。隊員は大阪、金沢、神奈川、東京、福島そして宮城と全国各地から集まった11人である。全く異なった育ち方をしてきた岳人同士であり、国内で3回ほど山行合宿を行った。結果はこれも11人の全員登頂であった。

そして今年、日本ヒマラヤ協会の「ニンチンカンサ峰」(7,206m)登山隊に参加し、11年ぶりにチベットを訪れることになった。ラサを訪れてその変貌ぶりに驚いた。広い道路、夜も賑やかな繁華街、何とディスコまであった。チベットの発展というよりは漢民族の逞しさといった方が正しいか。

今回の登山隊も南は広島、北は宮城という広域の隊員からなる13名の登山隊である。多聞にもれず、様々なドラマがあった訳であるが、1次アタック隊6名、2次アタックで3名が登頂に成功したことは、まずまずの成果であると思う。

3度のヒマラヤ遠征は、隊員の構成も東北と広域、隊の中での私の立場も異なるなど三様である。それぞれに貴重な思い出があり、達成感がある。これらの遠征で多くの貴重な体験ができたし、得たものも多かった(失ったものも相当あるかもしれない)。

また、有能で魅力的な隊長たちや個性的な隊員たちから学ぶことも多い。組織の運営や計画推進のノウハウ、集団の中での個人の在り方など。

山から離れても、多様な職種の仲間との人脈は自分の大きな財産になっている。

職場である「中学校」に帰って、生徒たちにこんな話をした。「われわれ人間は、目標が定まって、それに向かって活動している自分、多少の困難さにめげていない自分を実感する時に充実感を感じる生き物なんじゃないか。ヒマラヤは寒くて、腹が減ったけれどもとても楽しかったぞ。」

物質的に恵まれていることが幸福なのではなくて、大人でも子供でも向かうべき目的を持って生活できることが幸せなのかなと思っている。

楽しかったＢＣの生活

野口　道雄

ラサ(3,600m)、ランカーズ村(4,400m)で準備、高所順応訓練をしてＢＣ入りしたのは7月28日の午後であった。

ＢＣは高度4,850mの高山植物の咲く草地で若干傾斜があるがここに大きな隊員用テント3張、連絡官、通訳、コック用2張、大きなメステント1張のテント村を作った。

ここから頂上は見えないが正面にニンチンカンサの前衛峰の西壁が大きく広がりこの雪壁から融けだした水が川となって水場を提供してくれるす

ばらしい場所だ。

私は今回で2度目のヒマラヤ遠征でしたが、朝、きれいな水で歯も磨き、顔が洗え洗濯もできるこのＢＣは最高で大変くつろぐことができた。

ＢＣ入りした頃は可愛い地ネズミが地面の穴から顔を出して愛嬌を振りまいていたが、ＢＣを後にする頃は何処かに移動してしまい姿を見せなくなった。

私たちが彼らの環境を壊してしまったようで何か申し訳なく思った。

ＢＣ横の川の向こう側の草地では10㎝程度のブルーポピーやエーデルワイス等の小さな高山植物が咲き乱れとても美しいところです。

唯一の気がかりはすぐ近くのマヨン村から時々羊、ヤクと一緒にこのキャンプを訪れ靴下、靴等の隊員の私物をくすねる子供がいたことでした。洗濯して干している間は注意しなければならずこのことがなければここは楽園でした。

食事は中国登山協会から派遣された連絡官の趙さん、通訳の張さん、コックの黄さんが作った本場の中国料理をおいしく食べさせてもらいヒマラヤに来て体重が増えるのではと思った程でした。特にみんなで作って食べた特製餃子の味と作っている時の雰囲気は忘れられないものでした。

それ以上に楽しい思いをしたのは隊長他12人のすばらしい仲間と過ごすことができたことでした。残念ながら高山病にかかり登頂できなかった人もいましたが、いつかまたこのすばらしい人たちと何処かの山を登りたいものです。

ラサへの４往復と高所順応

飛田　和夫

成田を出発し北京から成都、高度500ｍの成都から３日目には3,650ｍのラサに入る。出発前に２～３度日本の最高高度の富士山に登ってきても体の調子が変だ。頭がボーとし、何となく熱ぽい、喉が渇く、急に立ち上がったり動いたりするとクラッとしたり、集中して物事をすると気分が悪くなったり、当然ホテルの３階、４階になると階段の登りが厳しい。さらにアルコールを飲みたくなくなったり、食欲もなくなったり様々だ。この間に出発の準備と4,000ｍ付近への高所順応行動を済ませる。

７月24日ジープでラサを出発し、まず4,700ｍのカンパ・ラを越し、4,400ｍのランカーズ（4,850ｍのＢＣに入るための順応をする地点）で計画通り順応と休養をしてからＢＣ入りすることになっている。25日志小田登攀隊長と飛田、さらに1995年栃木高体連隊の通訳をした今回の連絡官（趙玲玲さん）が地理を知っているので同隊のＡＢＣ、今回のＢＣ予定地に偵察へジープで行く。隊長と他の隊員は付近の小高いピークへ順応行動、不調の石川隊員は取り付いて直ぐに戻り、鮫川隊員は休養となる。

ＢＣ偵察に向かった連絡官は風邪気味で調子がいまいちの様子だったので、出発するときに無理して行かなくても２人で大丈夫ですよと言ったが、「ダイジョーブ・ダイジョーブ」と言いながら同行した。マヨン村の上部から先の行動時には車にいてもらい、ＢＣ偵察を終え車に戻ってくると一層調子が悪そうだったが、マヨン村でヤクを準備する交渉を済ませランカーズに戻る。夕食の時に顔を出さなかったのでどうしたのかと思っていると、病院に行き点滴をしているとのこと。風邪の治療なのかと考えていたが、夜通訳の張さんが「肺の薬はないですか、連絡官が調子悪い」と言ってくる。隊長が行き様子をみてくると肺水腫だろうと言うので行ってみると、まさしくそうだった。ベットに横になっているより座っている方がいいと起坐姿勢で咳き込み痰をかなり出しているのかテッシュペーパーが散乱している。緊急用の酸素をトラックから出し酸素吸入をする。ラサの病院に入れなければならないが、最終的にトラックの運転手に同行してもらうことにし、酸素器具の使い方、交換の仕方を教えジープで出発するが、ベットからジープに乗り込むわずかな時間酸素マスク

をはずしただけでもかなり苦しそうな様子だった。

翌朝、隊員が石川隊員の不調を訴えてきて、行ってみると咳込みがひどく、かなり苦しそうな様子。一晩中こんな状態だったという。ラサから調子が良くなさそうとみていたが、彼は今まで自らが隊長で何度か遠征を実施し、登頂しているし、昨年はＨＡＪのサマー・キャンプでムスターグ・アタにも登頂しており、自分自身のコントロール・自己管理はできるものと思っていたが、不調でどうにもならずにラサの病院に入りたいと言う。ためらうことなくラサに下らせることがベストであり、昨夜連絡官が行ったのと同じ病院に行くことにし、飛田が付き添ってラサに向かった。20時頃ランカーズに戻ってくるとミーティングをしており、連絡官、石川隊員の様子を伝える。鮫川隊員が調子悪いとのこと。

朝、石川隊員に付き添って病院に向かう前に、昨日不調で高所順応に行かずに休養をしていた鮫川隊員は、ラサからの発熱が次第に高くなっている、投薬で一時的に熱が下がったとしても無理をさせないでほしい、明日、隊はＢＣ入りをするが鮫川隊員には飛田が同行し調子が良くなってからＢＣに入ることにするからと話をしてラサに行って来たのだが、本日行動させたという……。当然ながら翌朝の食事時には39度の高熱で歩くのがやっと。２日続けてラサの病院へ。回復してきた連絡官が笑って対応してくれる。３人が回復してから一緒にＢＣに入ってくるようにお願いをして、今日もとんぼ返りをする。この日、隊はＢＣ移動でありマヨン村上部からは暗闇と濃いガスのために偵察の時より時間を費やしてＢＣ入りは22時を過ぎていたが、メステントに寝ていたという川崎隊員とコックがヘットランプの明かりに気づいてくれた。

翌日はＢＣ整理、装備、食料等の分類や整理等をするが、動きたくない、動けない、物事をより簡単な方へとかたずけてしまうという典型的な高所障害の症状を現す隊員がいる。

今回のニンチンカンサ登山を成功させる要因は、4,850ｍのＢＣにいかに順応して入るかがポイントであるので、ラサと4,400ｍのランカーズ（ヤムドク湖付近）で高所順応行動をした後にＢＣに入る計画が組まれた。

高所登山で一番大切な環境順応と初期順応行動がランカーズまでにある。成田を出発して３日目にはラサの異文化の中に体をおき、準備活動と順応行動を済ませる。ラサで4,000ｍ付近までの順応行動をしてきても、ジープで数時間後にはラサの都会的・文明的環境の中から一気に、トイレで目的のところに行くのに他人の物を踏まないようにツマサキで進むような状況だったり、食堂、部屋等々のあまりにも違った環境に、精神的にも肉体的にもマッチできなければ、たとえ出発前の国内でのトレーニングに励んできても、環境順応に失敗してしまう。

さらにそのような環境、状況の中で、とにかくピークに立つんだといったあせりが順応行動にも現れ、結果的にはマイナスの要素にもなってくる。今回の順応行動でも初期段階での獲得高度は１日に500ｍ前後といわれる高所登山のセオリーを無視した行動もあったが、その隊員はやはり翌日は苦労していた。限られた登山日数の中で、まして登山日数が少なければなおさら初期の環境順応と高所順応を的確に行う必要がある。

登山活動に入りＣ１へのルート工作とＣ１の位置を決めて下降してくると、隊長を含めた荷上げ隊が登ってくるが全員ではない。さらに下降していくと森山隊員、脇田隊員、滝田隊員がおり、脇田、滝田隊員は完全に横になっているので荷物をデポさせ一緒に下降するが、滝田隊員はやっとＢＣに戻る状態だ。翌８月１日は全員休養で滝田隊員は朝から微熱程度の様子だったが、夕方体調の確認をすると下痢の回数が非常に多く数分間隔になっている。酸素吸入をしてみると少しは間隔が延びたが、ガモフバッグに入れるには回数が多すぎてすぐには入れられないので、再度、酸素吸入をし少し落ち着いたときに急いでガモフバッグに入れ加圧する。本人は下痢と熱による体のだるさはあるだろうが、意識は正常で意志疎通ができたので、ガモフバッグ内での様子を聞くことは可能だが、やはり楽になるのだろう眠ってしまう。炭酸ガスが充満してくると苦しくなるので圧力を下げ、一旦チャックを開け空気を入れ換えると、炭酸ガスが放出されるのかテント内のガスランタン

が一瞬暗くなる。またガモフバッグを開くと下痢のために外に出なければならない。隊長と飛田が付き添い、隊員２名の交代で約50分間隔でこれを一晩中繰り返した（後に、ガモフバッグはこのような使用方法をするものではないと指摘されたが、使用方法が間違っていたのか、どこかが故障か不具合だったのかはっきりしない。いずれにせよ使用した成果はあった）。

前夜中に搬出計画を組み夜明けを待って行動を開始した。中尼公路で車を止め、飛田と通訳の張さんがラサの病院に付き添うこととし、公路で通行車を待っていると何とラサの病院からＢＣに向かってきた連絡官、石川・鮫川隊員が乗ったジープが来た。あまりのタイミングの良さにこみあげるものがあった。張さんにはＢＣに戻ってもらい連絡官にそのままラサに同行してもらう。ＢＣからマヨン村上部まで時々酸素吸入をさせ、その後はO_2キャンドルを用意していたが、その必要はなかった。しかし何度かジープを止めた。ラサのヒマラヤン・ホテルに一旦入り病院に行くと、なんと赤痢との診断結果が出た。症状は軽いので入院の必要もなく他人に感染する心配もないのでホテルから通院するようにとのことだった。日本では絶対に考えられない対応の仕方だが、いずれにせよ赤痢患者が出たということは、他の隊員も感染している可能性が考えられるので連絡官から医師に話をしてもらい、他隊員の薬を数日間分急遽用意してもらう。ホテルに戻ったのは夜半になっていたが日本の事務局（山森氏自宅）に連絡をする。滝田隊員を連絡官にお願いをして、翌朝、飛田は薬を持参してラサを発ち午後早くにＢＣに戻った。夕方、全員に薬を飲んでもらい８月４日は全員静養を兼ねた休養とさせてもらう。これ以上赤痢患者が出たら、まして上部で症状が出たら登山どころではない。３日後連絡官と滝田隊員がＢＣに戻ってきた。あまりにも早い帰りに、どうしてなのか、数日前の騒ぎは何だったのだろうか。

８月５日、気分も新たにＣ２～Ｃ３間のルート工作のためにＣ１へ、翌日は三角岩までルート工作をし、荷上げ隊もＣ１に入りいよいよＣ２へと思っていたが夕方からの雷と翌日までの悪天により全員ＢＣへの下降を余儀なくされてしまう。２日後再度ルート工作隊がＣ１に向かうが、飛田は痛めた腰が調子悪く、高橋隊員に交代してもらう。翌日Ｂ、Ｃ隊と一緒にＣ１に入り、次の日からは再度高橋隊員と交代してルート工作隊に入ることになっていた。ところが今朝ＢＣのトイレでコールタールのような真っ黒い便があり、アレー誰かなと思いながらＣ１に移動してきたところ、不調でＢＣに停滞している脇田隊員と隊長の定時交信で黒い便の当事者だった脇田隊員から「胃潰瘍が悪化してきたので出来ればラサの病院に入りたい。このまま症状が悪化すると吐血する」とのこと。Ｃ２直下までルート工作してきた志小田登攀隊長と隊長、そして飛田を含めて検討した結果、再度連絡官に同行してもらい飛田が付き添うことに決定する。自分自身の登山はヒョッとするとこれで終わったかと頭の中で整理をし、今回は縁の下の力持ち的存在であればいいと思っていたので何の悔いもなくＢＣへ駆け下った。熱が続き休養していた森隊員もラサに下ることになった。

翌朝、昨夜の霰が消えかかるころＢＣを出発。マヨン村から中尼公路で車を待ち、何とかラサに行くトラックをつかまえ、脇田隊員は運転席に入れ、森隊員、連絡官、飛田は荷台にあがる。今回もO_2キャンドルを持参したが使用することなく、途中で一般の乗り合いミニバス（ワゴン車）に乗り換えてやっとラサに到着したが、トラックの荷台での数時間で痛めていた飛田の腰は、さらにダメージを受けてしまう。

滝田隊員同様にヒマラヤン・ホテルに入った後、同じ病院に行く。脇田隊員は検便の結果が出ていないが状態は芳しくない。点滴、投薬等で少しは回復するとしても現時点では登山は無理だしＢＣにも行かない方がいい、２～３日治療して少しでも回復したら帰国することが一番であると、医師から連絡官、連絡官から飛田に話された。森隊員は２～３日通院して点滴、投薬すれば回復しＢＣに戻れるとのことだった。

２人の長い点滴が終わり、夜半の簡単な夕食を食べながら連絡官からの話を脇田隊員に話さなければならなかった。この夜再度の山森事務局宅へ長い電話連絡となった。翌朝、脇田隊員は昨夜のショックから立ち直り気持ちの整理をしていてく

れた。連絡官から西蔵登山協会を通じ帰国するための航空券の手配、北京での手配を中国登山協会に依頼していただき、帰国日程の確認、脇田隊員がこれ以上悪化しないであろう２～３日を連絡官に頼み、クンガ空港での見送りを森隊員にも頼んで、西蔵登山協会の人が北側の道からシュガツェへ行くというジープを中尼公路に変更してもらいＢＣには夕方戻った。

隊はルート工作隊がＣ２上部を偵察し、荷上げ隊はＣ２への荷上げを済ませアタック体勢に入るところだった。１日の休養後の14日、以前に三角岩の約6,000ｍまで達しているので一応6,000ｍ台の順応はできているとの確信から１次アタック隊６名のルート工作要員として出発し、17日には何とかピークに達することが出来たが腰痛には参った。テントの中ではほとんど横になっており、鎮痛剤、座薬の世話になるが、夜は利かずに痛みが引かない時もあった。出発前にテントの中で登山靴を履く時が一番つらかったが、登山靴を履き一歩外に出て背筋を伸ばすと行動中はほとんど支障がなかった。

アタックを済ませＣ３に戻ってくると２次アタック隊は４名がいるがずなのに滝田隊員の姿が見えない。彼の性格だと誰よりも早く、やれお茶だ、食べ物だと動き回るのだがいない、おかしいと思っていると隊長が相談したいことがあるという。滝田隊員はやはりテントの中で横になっていた。日本国内での準備活動、ラサやＢＣでの動き回る彼の姿を思い、ニンチンカンサに立つための努力、情熱、彼の力を持ってすれば十分可能性はあったのだが、説得し、明朝１次隊とともにＢＣに下降させることにした。誰かがせっかくここまで来て可哀相にと言っていたが、可哀相なのは不調者をここまで行動させ、さらにこれから上に行動させることだと反論する気にもならなかった。その日のうちにＣ２に下降し、夕方は若干調子が戻ったのか残念がっていたが、次の朝はさらに不調になっていた。しかし彼は荷下げに予想以上の隊員がＣ１に上がることになると、「俺も行きます」と言う。彼の性格である。赤痢による強烈なまでの下痢と体力の消耗を考えるとあそこまでよく頑張ったと思う。

今回のニンチンカンサ登山隊13名中９名が登頂した。隊長と登攀隊長によってタクティクスの素案が出され、種々検討の結果、基本計画が組まれ、ほぼそれに沿って、ＢＣからＣ１に１～２度上がった後にＣ１へ移動、Ｃ２へも同様の行動をしながらルートを伸ばし荷上げをしながら高度を獲得しピークを目指した。欲を言えばＣ２の高度とあまり変わらないＣ３のキャンプ設営後のＢＣへ下降して順応行動をするかしないかといった必要のないことが早く対応出来れば荷上げの量も違ったのではないかと思う。しかしラサからＢＣ、ＢＣ以上の登山活動と高所順応を的確に考慮した登攀計画は一定の成功ではないかと考える。ピークに立てなかった人、ラサの病院に入った人がいたので大きな意味では完全な成功とは言えないが、違った意味での外的要素も含まれさらに各隊員の国内山行の違いにも起因すると考えられる。

なによりも、全員が無事に帰国できホッとしたのが実情でした。

登山を終えて

森山　安次

私は1985年に中国領カラコルムにあるクラウン峰が初めての遠征で、今回のニンチンカンサ峰が６度目で、登頂したのは半分の３回である。

西蔵では、10年ぶりでラサの街並みの変貌には驚いた。

ＢＣまでの体調は、今までの遠征の中で一番良かった。その理由は次の通りであった。

ラサを出発までの食事を考えると、食べることに関しては、今までと同じように腹八分目を心がけて実行した、アルコールに関しては、すこし少な目にしたのが内臓に良かったかもしれない。また今回は、中国側の歓迎の宴席がなかったことが、

暴飲暴食をしなくて済んだことかもしれない。

ラサ滞在中、精神的ストレスが溜まらないような行動をしたのが良かったと思う。

出発１ヵ月前の２度の富士山登山と、ＢＣまでの高度経験からの高所順応に対する精神的余裕を持っていたからだと思う。

高所順応訓練における登高スピードは１、２時間位、休まないで動ける速度を心がけて行動をし下降してからは疲労回復につとめた。

朝目を覚まし、体の調子が少し変調だったときは私なりの療法をし、慎重に行動した。

ＢＣから上部での体調維持は精神的疲労を翌朝に持ち込まないように心がけたが、２、３日は翌朝まで持ち込んだため、体調を少し崩したが休養日になったので助かった。

ＢＣでの食事とアルコール摂取量は、今までの遠征のときと同じであり、アルコール摂取の量は体調を診ながら決めた。

登高のスピードは私が一番疲れない速度で１時間以上行動し休憩を取ったが、30分位で休憩を取ったり、スローすぎる登高だとかえって疲れが大きかった。

最後に川崎君と会うたびに（日本を出発する前から登山期間中）私が口癖に言ってた言葉があります。「自然体で登山しようよ」とのことですが、今考えてみると、精神的に余裕のある遠征だったのだと思います。

途中下山、１人帰国の旅

脇田　康治

８月10日朝、これまでの症状から、もしかしてまさか？と恐れていたことがついに起きた。真っ黒な便である。下血である。「ウワー、やってしまった、これで登山は終わりだ」と茫然自失となる。その時、ニンチンカンサに続く雪の稜線を仰いだのかどうか、は記憶にない。

胸焼けを自覚したのは７月26日ランカーズでの高所トレーニングを終えた日の夜半である。28日のＢＣ入りは腹痛で時々しゃがみこむほどであった。その後一旦回復したように思えたのだが、８月３日Ｃ１荷上げの帰途再び強い胃痛が始まり皆より１時間の遅れでＢＣ帰着、後ほど隊長に戦列を離脱したいと申し出たのである。この時、胃潰瘍の再発？という思いが湧き、それなりの薬を飲み始めた。以後レストが続き小康状態のうち６日再びＣ１荷上げ、Ｃ１ステイの後ＢＣへ降りる。そして10日朝、再びＣ１へ向かう日、それは起きた。

隊長に「出血しているようなのでラサへ降り病院へ行きたい」と進言するが、隊長は小生の症状の深刻さがよく分かってなかったのではなかろうか。これまで下山する者が相次いだし「えー、何で？」という感じであった。ともかくこの日の私の行動はＢＣステイとしてもらった。

翌11日、熱が下がらない森隊員とともに、付き添いとして飛田隊員、趙連絡官とラサへ降りる。公路まで通訳の趙さんとコックの黄さんに荷物を担いでいただく。迷惑かけました。

12、13日と「西蔵軍区総医院」へ通い軍医の問診と点滴を受ける。結論は「ＢＣへ戻ってはならぬ、早急に帰国し日本の病院へ行け」というものであった。14日ラサ→成都→北京、15日北京→成田と１人ションボリ帰国した。北京では趙建軍氏を煩わせてしまった。すみませんでした。

広島に帰り、以前同じ症状（出血性胃潰瘍）で入院した病院へ行き診察を受けるとひどい貧血で、即刻入院となった。もう一度出血していれば相当ヤバイ状態であったらしい。山を下りてよかった。西蔵の軍医に謝謝。

実は小生、昨年10月「ひろしま国体・山岳競技」で競技役員をおおせつけられ、終了後上記の病名で生まれて初めて入院する（外傷で１度入院したことがあるので正確にいうと２度目）といった経歴をもっていたのです。その時は２日下血が続き３日目にドバッーと吐血したのです。

帰国後の天城隊長の（医師からの話）によると

胃潰瘍は罹病後１年以内に高所にいくと再発する可能性が高いそうです。私は知らなかった。残念です。

今はお酒も飲めるようになり、山にも登り、走っています。10月中旬には、当地の毎年出ているマラソン大会の「親子リレー」の部で３位に入賞し、地方紙に記録が載りました（子供のおかげです）。ただ、次の高所はどうしようかと一抹の不安を抱いています。

最後に、この度の事故で隊長並びに隊員の皆様に大変ご迷惑をおかけしましたことをお詫びします。

ヒマラヤへのハードル

鮫川　太一

40代までに一度は挑戦したいとヒマラヤ行きを決めたが、山の厳しさは私の想像を遥かに超えていた。今にして思えば高所順応以前の環境に順応できなかったのかもしれない。まずラサまでの油の多い肉料理、そして連日の酒などで体の変調をきたしていた。ランカーズに着いたときは日陰でないと立てなかった。解熱剤で一時は下がったものの4,900ｍの高所順応は結果的にオーバーワークとなり39.6度の高熱でフラフラ状態。体力には多少自信を持っていたが、ラサの病院に着いた時は奈落の底に居る気持ちであった。同室にて「これもヒマラヤの魅力ですよ」と言う石川隊員の余裕は私にはなかった。５日遅れてＢＣに戻った時は絶好調を良いことに調子に乗り、荷上げ下山のＢＣ直前の走りで捻挫してしまう。登頂を目指すならば冷静沈着が肝心で本当に軽率であった。

休養を余儀なくされほとんど動けなかったが、そんな時飛田隊員がどうしてそんなに動けるのか不思議に思えた。やはり高所ではじっとしているだけで、かえって体力を消耗するのだ。

アタックの戦列からはずれ交信の役割にまわってからは山と天気が特に気になり、一次隊だけでも登頂してほしいと祈るような気持ちであった。

暗雲が空を覆い、夕方大雪が降りＢＣのテントが押しつぶされたとき、アタック隊はどうしているのか気が気ではなかった。一次隊が頂上から「天城隊長　登頂できてありがとうございます」という労をねぎらう声が入ってきたときは本当に嬉しかった。その場に居合わせて生の感動を共有できたのは忘れられない思い出である。

何故登れなかったのかとつきつめて問えば、私には登頂したいという意志が薄かったのかもしれない。川崎隊員のように半年で体重を減らして、７回も富士登山をこなしたり、野口隊員のように60歳までヒマラヤへの執念を燃やし続け、若い私たちよりも、高所でてきぱき動けるのに感心してしまう。その点私は何かが欠けていたのだろう。

いつかまた金を貯め、気力を充実し体と技術をいっそう鍛えヒマラヤに挑むつもりでいるが、妻からの「今度行くなら別れてから行って」という脅しをどう説得するかが一番の難題である。

ニンチンカンサ登山隊に参加して

加藤　和美

今夏、初めて7,000ｍを超える、ヒマラヤ登山隊に参加して思ったこと、印象に残った事を書こうと思います。

まず、高度順応については、大変に心配していました。自分がはたして、7,000ｍを超える高度に順応できるのか、あるいはまったく高所には向かないのではないか、と出発前には心配していました。事前の準備といえば、富士山に２回登っただけ。名古屋にある高山研究所には何回か行こうと思っていたけれども、結局は行かずじまいとい

う状態での出発となった。

しかし同じ隊員の石川さんの「大丈夫だよ。何とかなるよ」という言葉は何の根拠もなかったけれども、自分には大きな励みになりました。何回も高所に行ったことのある人の言葉だからだろうか……。

さて、ＢＣ入りする前に、ランカーズという町（標高は4,400ｍ程）に高度順化のため３日程滞在した時、連絡官や他の隊員が高度障害のために、ラサに下山するなか自分にはまったく症状が出なかったので妙な自信らしきものが出てきたのは確かでした。ＢＣの高度は4,800ｍ程だったと思いますが、この高度になるとさすがに、体が重い、少し早く歩くだけで息が切れるという症状は実感しました。しかし、Ｃ１以上への荷上げの時には高度が上がる事による具体的な症状はでなかった。そして幸運にも登頂することができた。

やはり飛田さんが言っていたように4,000ｍ前後の初期順化が一番大事でそれがうまくいけば、7,000ｍくらいまでは大丈夫だという言葉は本当だなと実感した次第であった。

雑　感

高橋　敏雄

Ｃ２キャンプ予定地まであと１歩、予定地の鞍部にはルート工作隊が残した赤布の束が雪面に鮮明に浮かび上がっていた。Ｃ２さえ出来てしまえばＣ３そしてアタックへと先の見通しが明るくなるような、そんな思いが強く、この１歩がとても大切に思えてならなかった。あたり一面、雪面と同じ灰色の空間。山頂はまるで見当がつかない。時折りお椀を伏せたような丸いピークが遥か向こう浮かんでは消える。その頂が山頂としたらかなり遠い。

後続の天城隊長や加藤隊員と共にテントを設営し、天候の悪化を気にしながら小雪が舞う道をゆっくり戻る。午後も半ばになると気温も上がりアイゼンは雪団子になってしまう。この時のフィックスロープは有り難い。ふらふらの千鳥足でも安心感と共に安全圏へ導いてくれる。

ルート中最大傾斜の三角岩も雪玉の転がる勢いで下りきる。本日の役目を無事達成し足取りが軽い。ブルーポピーが咲くベースキャンプへ早く戻ろう。

緑のベースに戻るとレストしていた隊員から温かな紅茶と出迎えを受ける。甘い飲み物は一口ごとに疲れをいやし、隊員の心遣いに心温まる思いをする。

陽が沈み、満天の星空の下、日本全国からこの山を登るために集まった個性豊かな隊員と一献をかたむけ話が弾む度に人一倍の幸せを感じる。その日、その時を大切にし頂へ上がりたい。「誰か１人でもいいから頂に立ってほしいなぁ」……こんな思いをほろ酔い加減で思っていた。

遠征も無事終了し、ニンチンカンサの白く輝く峰々を思いだし何故か、頂に立っている時よりもＣ２建設の方が感慨深いのです。私には結果よりも重荷で喘ぎ、もがいているアプローチの方が性にあっているような気がする。帰国後、フルマラソンやトライアスロンに毎週連続参加し、その度に記録が低迷しています。そのため、また、また苦しんでいる今日この頃です。数年後また、一緒に行きたいものですね。

1997年　１年を振り返る

川崎　浩史

１月　ここ２年以上仕事の忙しさから、山から遠ざかっていた私は、正月休みに日帰りで奥

多摩の川苔山へ軽装で出かけたのだが、運動不足と体重増加の為まるで歩けず、次々と中高年ハイカーに追い越され、ヨレヨレで頂上に立った始末だった。「このままではまずい、人生の軌道修正をしなければ」と思いたち、即、ＨＡＪのニンチンカンサに応募する。そして「今日から気合い入れてガンガン行くぞ」と威勢よくトレーニングを開始したのだが、軽くジョギングをしただけで、足はつるわ、腰とひざは痛いわで、３㎞も走れず愕然としてしまう。

２月　安達太良山の合宿に参加。小屋までの２時間くらいのウォーキング中あまりのつらさに、申し込まなきゃ良かったと後悔するほどで本当にいやになる。とりあえず、奥多摩にハイキング通いをする。

３月　毎日のトレーニングとハイキングで少し体が軽くなってきたようだ。

４月　何年か振りで富士山に行くが、またまたノロノロ君のバテバテ君になってしまい、自信をなくすが、とりあえず本番まで富士山一本にしぼることに決める。

５月　毎週の富士山通いもあきてくるが、タイムは確実に縮まってきているので荷を重くする事にする。

６月　何度目の富士登山のときか忘れたが、６合目あたりから、ふと後ろを振り返るとやたらでかく見たことのない独立峰があり、あんなところに大きい山なんかないのになあと思って眺めていたら、それは雲だった。

７月　この半年間のトレーニングのおかげで20㎞のランニングや富士山も楽にこなせるようになり、20代のころより、はるかにおちるが、体力もついたような気がする。５年のブランクは大きいが、一応国内でやれるだけやったのでなんとかなるだろう、と思いながら日本を出発する。

いきなり飛行機でのラサ入りはさすがにつらいものがあったが富士山通いのおかげか順調に順応してベースキャンプに入る。

８月　登山活動中、滝田さんを降ろしに麓の村に下った時、はじめてニンチンカンサの全容を見ることができた。なんと、その山容はいつか富士山で見た雲の形とまったく瓜二つで、その瞬間なぜか、登頂できると確信する。その後、登山は悪天候に阻まれながらも順調にアドバンスキャンプを作り、私も諸先輩のおかげで８月17日に無事登頂することができた。

今回のメンバーは、ほとんど私より年上で良識や協調性のある方々ばかりで、登山中のいがみあいもなく、チームワークのよい遠征隊だった。また、山以外の社会生活面でも大変勉強になることが多く、本当に有意義な40日間であり、私個人も５度目の遠征ということですべてにおいてそつのない行動をするということを目標にしていたのだが、ほぼ達成できたようで大変満足のいく登山であった。

９月　日本に帰ると、土日指定の大規模な物件を受注しており、休み無しで１か月働きっぱなしの生活となりあまりのギャップに中国での40日間が夢か、幻かと思ってしまう。

10月　不景気の影響で、年間600万円も仕事が無くなり、真っ青になる。やはりこの半年間ニンチンのことばかり考えていたのがよくなかったと、深く反省し日本社会の厳しい現実をいやというほど味わう。

11月　新しい営業活動について試行錯誤する。

12月　新規の顧客がつき、１月から持ち直せるめどがついた。これで年が越せる。

１月　明けて1998年、正月休みに日帰りで奥多摩の御前山に軽装で出かけたのだが、この４か月間の仕事漬け生活による運動不足と体重の増加でまったく歩けず、かみさんについていくこともできず、またまたヨレヨレで頂上に着いた（ニンチンカンサよりつらかった)。まったく、はやく人生の軌道修正を行いたいと思う今日この頃である。

ニンチンカンサから帰って

森　達弥

帰国して、あっという間に３ヵ月が過ぎた。異国チベットのすばらしい日々のことを今思い出すと、北京からの中華料理に始まり、あの美しいヤムドク湖を車窓よりながめた、なのはなの黄色と真っ青な湖、頂上に立てなかったが雪を抱いたニンチンカンサそのどれも次々と脳裏に浮かんでは、また消えていく。中国の大都市の開発の波、また一方では、マヨン村のようにいまだに発展の波から大分距離がある所もある。大きな中国。

今回の遠征で、自分自身が山にこれからどう接したら良いのか考えるひとつの機会にしようと思った。考えたが、そんなに難しいことではなかった。すなわち楽しければ続ければいいことであって、そんなに肩肘をはって考えることでもない。また疲れた時は横道にそれ、立ち止まって足踏みしたっていいと思った。社会では厄介な人間だと言われたり、冷たい目でみられたりしてもしかたがないことなのかなと思うようになれた。

仕事からはなれて、40日間、登山行為に専念できた。途中高山病にかかり、頂上を踏むことができなかったが、色々な山男から色々と教えてもった。感謝、感謝。

チベットで一番印象に残ったことはなんといってもラサでの通院の日々である。８月11日からの３日間の通院。８月９日より熱が下がらない状態となり、下痢ぎみで食欲もなく、意欲が湧いてこないが意識ははっきりとしていた。11日に下山を決意した。下山途中とても悲しかった。「これでもうこの山ともおわかれになるのか」という複雑な思いで涙で一杯になった。その後、公路からトラックの荷台にのせていただき、ラサにある軍の病院へつれていってもらった。病院では血液検査と解熱の注射、そして手の甲からのビタミンとブドウ糖の点滴。生まれて初めての点滴となった。以後３日間ヒマラヤホテルから通院した。

今回も、また色々な方々にお世話になりました。

本当に有り難うございました。

登山前、ポタラ宮前の広場にて

走向山野

——宁金抗沙之行

赵玲玲

中国是多山之国，山的王国，拥有数不清的大小山峰，世界上8000米以上的高峰，中国就拥有9座。如世界第一高峰珠穆朗玛峰、次高峰乔戈里峰、“众山之王”贡嘎山、“天上掉下来的石头”南迦巴瓦峰等等。这些美丽而神秘的高峰，是世界各国登山家心目中的“圣地”。日本喜玛拉雅协会的登山家们正是怀着对圣地的憧憬，今夏来到我国西藏攀登宁金抗沙峰，我有幸作为联络官同行前往。

7月份是西藏一年中的黄金季节，虽是夏天，但气候宜人，与北京的晚秋差不多，高高的兰天，温暖的阳光，新鲜的空气。我们登山队一行16人，于7月22日乘飞机抵拉萨。初次来西藏的人，突然踏上海拔3700米的地面时，也许会期待着有点不同的感觉，象走太空步、脚下绊蒜或是上气不接下气…。我已是多次到过西藏，所以感到很轻松，没有什么不适。那天空气十分清新，不用望远镜就能够看见周围连绵起伏的山峰，这时心里想，我在一步步走近山野、走近宁金抗沙峰。

我们在拉萨共逗留了三天，主要任务是高山适应、采购物品、整理装备。别小看做这几件事，初到高原的人，会因缺氧造成高山反应，头痛、浑身无力、上气不接下气、发低烧、严重者患肺水肿、脑水肿。饭店里没有电梯，因整天闲不住，多次地上下三层楼，中间总要停下来喘口气再接着上。可见没来过西藏的人，很难想象是个什么感觉。

7月25日，我们离开拉萨坐车沿拉萨河向西，前往浪卡子县，过曲水大桥后，就进入盘山公路。这条路现被人称为“老路”，原是中尼公路的一条主干线公路，是通往江孜的必由之

路。后因修了新公路，路况好、既不需要爬山、又节约时间，所以大部分车辆现已都不走“老路”了。但很多外国观光旅游团，为子欣尝美丽的羊措雍湖(简称羊湖)，就必须走这条路。我们登山队攀登的宁金抗沙峰也经过羊湖，到达岗巴拉山顶，因当天雾大，没有望到宁金抗沙峰，但羊湖的风景却美不胜收。羊措雍湖，藏语意为“天鹅池”。湖槽狭长曲折，形似一只展翅欲飞的天鹅，藏族人民尊之为“圣湖”。相传有位仙女因思凡下界而犯天规，上天把她变成天鹅贬在这里，诸峰的神女们都与她恋恋不舍，常来此洗澡与她相伴。而今，洗澡的神女们没有了，只留下这个美好的传说，以及湖中丰富的鲤鱼和夏季成群的水鸭。“圣湖”南面有座千年古刹桑丁寺，是西藏唯一女活佛多吉帕姆的主持寺院。

宁金抗沙峰是拉轨岗日山的主峰，它悠然凌驾于“圣湖”之上。因此，藏族人民把它叫做“宁金抗沙”，意思是夜叉神住在高贵的雪山上。其海拔7206米，地处江孜和浪卡子县交界处。周围耸立着10余座6000米以上的主峰，是西藏中部四大雪山之一。

按计划我们在浪卡子县住二天，进行高山适应。

7月26日的早晨，太阳在东方山巅探出头，我们打好行装踏上宁金抗沙峰的征程。从浪卡子驱车，一路上可看到两壁高耸的山峰，使我们行驶的那条小路显得甚为渺小。沿着小径前行，过了卡若拉山口后，可看见宁金抗沙山体，它雄伟、危岩嵯峨，顶部尖锥突兀，坡岭沟壑间的终年积雪，发育了条条冰川，看上去十分壮观。再往前行不远，便到了大本营的前沿。从这里开始徒步，翻过一座山、趟过一条小河，约走一个小时就到大本营了。

大本营因海拔较高，在恶劣的生长环境里，草木的花季非

常短促，但一旦开放，却又非常炽烈。这与我们支的6 顶颜色各异、大小不一的帐篷交相辉映，与大自然融合在一起，非常美丽。离我住的帐篷不远的地方，有座白塔，酷似北京的白塔寺。当地藏族人民在白塔上系了很多彩条，靠近塔尖的地方还系有个大铃铛，每当刮风时，铃铛便发出清脆的声音，在万籁俱寂的夜晚听到这铃声，就象听崔眠曲一样。

到大本营后的20多天里，是日本登山家们最忙、最辛苦的日子，他们每天上山、下山地进行着高山适应，运送登山物资、修路等，为最后的冲顶做好各种准备工作。经过他们的不懈努力，终于在8月17日、 18日两天，有9人登顶成功。 顿时大本营充满了喜悦的气氛，大家不断举杯祝贺，宁金抗沙峰又一次被人征服了。

我曾多次地问过国内外从事登山的人士，“你为什么要登山？”答案虽不尽相同，但他们的精神却是一致的。登山是一种劳动，又好比一场战斗，它比单纯的运动更有深奥的意义。登山也是一项勇敢者的运动，它能全面锻炼人的体格，培养人机智、勇敢、刻苦耐劳和集体主义精神；它还可以使人扩大眼界，增长知识，丰富人们的生活。一座山峰的征服，对登山者来说是向自我的挑战，是向人类生理极限的挑战，是向大自然的挑战，它给予人们更多的是精神财富。

今天，人们走出繁华的城市，走向山野、回到大自然的怀抱，与山融为一体，需要的就是这种精神。

対　訳

吉田　隆司

中国は山多き国であり、山の王国である。中国は数えきれない大小の山々を擁し、世界における8,000メートル以上の高峰のうち中国には9峰がある。例えば世界第一の高峰チョモランマ、第二の高峰乔戈里峰（チョゴリ）、山々の王“ミニヤ・コンカ”、“天から落ちてきた石”南迦巴瓦峰（ナムチャバルワ）等々である。美しく、神秘的なこれらの高峰は世界各国の登山家の心の中の「聖地」である。日本ヒマラヤ協会の登山家の方々もこの聖地への憧れを胸に秘め、今年の夏、チベットにおいでになり、寧金抗沙（ニンチンカンサ）峰への登山をされた。その際、私は幸いにも連絡官として同行させていただいた。

7月はチベットでもっともすばらしい季節である。夏ではあるが、心地よい気候、澄みきった青空、暖かな陽光、新鮮な空気は、北京の晩秋のようでもある。我々16人の登山隊は、7月22日に飛行機でラサに到着した。初めてチベットに来た人は、一気に海抜3,700メートルの地面に降り立ったとき、期待していたものとは違った感じを味わうことになるだろう。空中を浮遊するかのように足もとはふらつき、息切れ等々の状態がおこる。私はすでに何度もチベットを訪れているため、その感覚は本当に軽く、不快さを感じない。その日、空気は澄み渡り、望遠鏡を使わなくとも、周囲に連綿と続く山々を見ることができ、我々が一歩一歩山野に分け入り、寧金抗沙峰に近付きつつあるのを感じた。

我々はラサで3日間滞在したが、そこでの主な任務は、高山への順応であり、物資の購入、そして装備の整理であった。これらの任務は軽視するわけにはいかない。初めて高山に来た人は、酸素不足により高度障害をおこし、頭痛がし全身がだるく、呼吸がまともにできず、体温が下がり、重症者は肺水腫や脳水腫になってしまうのである。ホテルにはエレベーターはなく、一日中、何度も一階と三階を往復しなければならないが、その途中、どうしても途中で立ち止まり一息、息をつかないではいられない。チベットに来たことのない人には、これはなかなか想像できない感覚であろう。

7月25日、我々はチベットを離れ車でラサ河に沿って西へ、浪卡子（ランカーズ）県へと向かった。曲水大橋を過ぎると磐山（パンシャン）公路に入る。この道路は今では「古い道」と称され、元は中国・ネパール公路の主要幹線道路であって、江孜（シュガツェ）へ行く際に必ず通る道であった。その後、あたらしい道路ができ道路状況はよくなり、山を上る必要がなく、また時間も節約できるため、ほとんどの車はこの「古い道」を通らなくなった。しかし、外国からの観光団は美しい羊措雍（ヤムドク）湖（羊湖）を見るために、必ずこの道を通る。我々登山隊が登る寧金抗沙峰も羊湖を経て、達崗巴拉（ダガンバラ）山頂に至るルートをとった。この日は霧が濃く寧金抗沙峰は望めなかったが、羊湖の景色はこの上なく美しかった。ヤムドク湖とはチベット語で「白鳥の池」の意である。湖は細長く曲がり、あたかも一羽の白鳥が飛び立とうとしているようで、チベット人民は「聖湖」として敬っている。言い伝えでは、一人の仙女が下界に憧れ天の規則を犯してしまう。そこで天の神はその仙女を白鳥に変えてここで見せしめにした。峰々の女神は仙女と名残惜しみ、しばしばここにやってきては沐浴し、彼女につきそった。今日では、沐浴する女神はいなくなり、この美しい伝説と湖に棲むたくさんの鯉と夏に群れをなす鴨だけが残っている。「聖湖」の南側に千年の古刹である桑丁寺があり、チベットでただ一人の女高僧多吉帕姆（ドゥオキバム）が取り仕切る寺である。

寧金抗沙峰は拉軌崗日（ラグィガンリ）山の主峰で、「聖湖」の上に悠然と聳えている。そこで、チベット人民はこれを「ニンチンカンサ」と呼び、夜叉神が崇高なる雪山に住んでいるという意味である。海抜7,206メートルで、江孜と浪卡子県の境に位置する。周囲には10余りの6,000メートル以上の主峰が聳え、チベット中新四大雪山の一つである。

計画どおり、我々は浪卡子で３泊し、高度順応訓練を行った。

７月26日の朝、太陽が東の山の頂に頭を出すと、我々は荷物をまとめ寧金抗沙峰征服へと踏み出した。浪卡子から車を走らせ、道中、両側に高く聳える山々が壁のようで、我々が走る道が極めてちっぽけに感じられた。細い道に沿って進み、卡若拉（カワラ）山の入口を過ぎると、寧金抗沙峰の姿が目に入った。それは、雄大で、高く険しい岩山で、その先端はキリの先のようにとんがり、谷間には万年雪がのこり、いくすじもの氷の河を形成し、壮観であった。更に進むとまもなく、ベースキャンプへの入り口に着いた。そこから歩き始め、山を一つ越え、河を渡り、１時間ほどでベースキャンプに到着した。

ベースキャンプの高度が高いため、植物の成長には劣悪な環境で、草木の開花時間は大変短いのだが、花が咲くや、それはそれは鮮烈である。その花々が我々の色も大きさも違う６張りのテントと互いに照り映え、大自然と融合し、その美しさは見事であった。我々のテントからさほど遠くないところに白塔があり、北京の白塔寺によくにていた。当地のチベットでは白塔に色とりどりの紐が結ばれており、塔の先端近くには更に鈴があり、風が吹くたびに澄んだ音色をだし、しーんと静まりかえった夜、この鈴の音は、子守歌のように聞こえる。

ベースキャンプに到着してからの20日あまりは日本登山隊隊員のもっとも忙しく、一番ご苦労な日々であった。彼らは毎日山を上ったり下ったりして、高度への順応を行い、登山物資の搬送、ルート作りと、登頂のための色々の準備をしっかり行っていた。彼らのたゆまぬ努力の結果、８月17日、18日の２日間で９人が登頂に成功した。その時、ベースキャンプは喜びに満ちあふれ、寧金抗沙峰が再び征服されたことを祝う乾杯が続いた。

私はかつて何度も国内外の登山家に「貴方はなぜ山に登るのですか」と尋ねたことがある。その答えはすべてが同じではないが、しかし、彼らの精神は共通しているのである。登山はある種の労働であり、そしてまた戦闘のようでもあり、それは単純なスポーツより更に奥深い意義をもったものである。登山は勇敢な人々の運動であり、体を鍛え、人間の知恵と勇気を養い、刻苦奮闘の力と集団精神を養い、視野を広め、知識を増やし人々の生活を豊かにできるものである。山の征服は登山家にとって自分への挑戦であり、人間の生理的限界への挑戦であり、大自然への挑戦であり、人々に更に多くの精神的財産を与えるものなのである。

今日、人々がにぎやかな都市を出て山野に向かい、大自然のふところに還り、山と溶け合い一体となるのに必要なのは他でもなくこの精神である。

張通訳（左）と趙連絡官（右）

ニンチンカンサ（寧金抗沙・Ningqin Kangsha）登山小史

＊位置：ラサ（3,658m）の南西約113km
［28° 90′ N，90° 10′ E］

＊アプローチ：ラサまでは北京～成都が飛行機で約2時間、成都～ラサが約1時間40分の旅。ラサからはカンパ・ラ(4,756m)に登り、ヤムドク・ツォからランカーズの手前でギャンツェ方面に向かい、カロ・ラ(5,036m)を下ると南面のＢＣである。さらに6kmほど西に進み、公路を外れて北に進むと西面のＢＣに到着する。ラサからカロ・ラまではジープで4時間半程度。

＊ルートの所要日数：95年南面の福岡大学隊は、7月27日にＢＣを建設し、キャンプ3つを出して8月17日に登頂した。一方、97年に西面に入ったＨＡＪ隊は、95年の栃木隊ルートに取りつき、7月28日にＢＣを建設し、キャンプを3つ出し8月17日に登頂した。

＊山の概念：主峰7,206mの南西稜上にトゥゴロン6,763mがある。北稜上に6,484mのカマ峰、南東稜上に6,570m峰がある。

また、カルション・チューを挟んだ南方には、カルション6,571m、チャンサンラム6,325m、6,249mのジェイトンソンスムなどがあり、短期間の山登りが楽しめる。

＊通常の登山時期：春、夏、秋

＊山名：チベット語で「幸福の水、幸福の源」の意。ノジンカンサNodjinkangsa、レンリカンサLenrikangsa、キェンカンKyenkangとも呼ばれる。

＊小史：1985年秋、大分県山岳連盟隊が、南西稜から登頂を試み、トゥゴロン峰の初登頂に成功したが主峰は断念した。86年春、チベット隊が南西稜から4月18日初登頂に成功した。92年に自衛隊山岳連盟隊、95年夏栃木県高体連隊が西面から初登攀。同年夏に南面から福岡大学と北京大学の合同隊が登頂した。

参考文献：輝ける白き峰［栃木県高体連登山部1996年3月刊］

登山の概要

■主峰（7,206m）

1985年

8月～9月　南西稜　大分県山岳連盟隊

初登頂を目指して9月2日13人で入山。南面氷河下5,000m地点にＢＣ設営。右岸から稜線に出て5,600m地点に10日Ｃ1を設営。15日5,950m地点に仮Ｃ2を出す。21日南西稜に入り、6,350m地点にＣ2を設営した。23日アタック出たが6,800m地点でクレバスに前進を阻まれ断念。同日トゥゴロン峰を目指した松元、中尾両隊員が初登頂に成功した。

［隊長：興田勝幸(41)　伊東亨(55)　宮脇稔(32)　木辺正夫(53)　松元徹(35)　杉山恵治(31)　中尾俊孝(32)　西嶋久貴(30)　浅田誠治(28)　恒松勲(27)　荷宮英二(26)　原勇人(23)　井原真美(25)］

［第2次チベット・ヒマラヤ登山隊報告書（大分県山岳連盟　1986年12月刊)］

1986年

4月～5月　南西稜　チベット登山隊

初登頂を目指して4月10日南面4,996m地点にＢＣを設営。18日6,700m地点にＡＣを設営。一旦ＢＣに下降し、27日6,100mのＣ1を13人が出発しＡＣに入る。28日7時半にＡＣを出発したがテレビカメラマン1名が脱落。9時25分桑珠が初登頂に成功。9時45分他の11名（加布、旦真多吉、小格桑、辺巴、拉旺、旦増、旺多、加措、辺巴扎西、小次仁、普布）も登頂に成功した。

［隊長：羅則以下20名］

［中国登山運動史286頁］

1992年

4月～5月　南西稜　自衛隊山岳連盟隊

4月18日5,000mにＢＣ設営。5,600m地点にＣ1、6,200m地点にＣ2を設営し、5月4日に隊員1名とチベッタン1名が登頂した。

［隊長：大崎直彦以下6名］

［山岳年鑑51頁］

1995年

7月～8月　南西稜　日中友好合同登山隊

福岡大学と北京大学の合同隊。先発が7月26日南面氷河下にＢＣ設営。8月7日5,700m地点にＣ1設営。13日6,300m地点にＣ2設営。16日6,600m地点にＣ3を設営して翌日4時20分に石村、矢田、菊池、重川の四名がアタック。9時20分に登頂した。14時41分に中国側も登頂した。

［隊長：山内一男(58)　川邊義隆(54)　石橋康治(48)　菊池守(40)　石村義男(44)　矢田康史(47)　重川英介(20)　前田亮(18)　堀川明大(19)］

［寧金抗沙峰合同登山隊報告書（福岡大学体育会山岳部・山岳会）］

7月～8月　西面～南西稜　栃木高体連隊

7月28日西面入口4,690m地点にＢＣ設営。29日4,850mにＡＢＣ設営。8月2日5,750m地点にＣ1設営。8日6,400m地点にＣ2設営。11日6,480m地点にＣ3設営。17日石澤、神島、菅又、ダワ・チリが登頂。19日後藤、稲葉、石塚、深谷、チュワング・ニマ登頂。20日滝田、川崎、猿山、小口、ミンマ・ヌル登頂。

［隊長：石澤好文(43)　神島仁誓(41)　後藤尚(34)　増渕仁一(47)　滝田道明(43)　荒川竜一(41)　川崎真澄(39)　富永孝明(34)　猿山浩(34)　稲葉昌弘(33)　林光武(32)　小口貴文(29)　遠藤洋志(26)　菅又久雄(26)　林祐寿(26)　石塚学(21)　深谷篤志(19)　松島一雄(30)］

［輝ける白き峰（栃木県高体連登山部　1996年3月刊）］

月刊『ヒマラヤ』322号より転載

御協力者一覧

大変お世話になりました。
厚く御礼申し上げます。

隊員一同

在日本中国大使館	江尻健二	橋本康弘
中国登山協会	尾形好雄	樋上嘉秀
西蔵登山協会	木辺正夫	本間　肇
四川省登山協会	近喰　司	宮川裕子
ＩＣＩ石井スポーツ	鮫川佳那子	宮崎久夫
アルファ食品㈱	沢田幸子	八木原圀明
交楽荘薬店	菅原愛里	山田忠雄
ＨＡＪクーラカンリ登山隊	関根幸次	山田利子
わらじの仲間	寺沢善信	山森欣一
泉田清幸	寺沢玲子	吉田隆司
稲田定重	中川　裕	

寧金抗沙峰
―― ＨＡＪニンチンカンサ峰登山隊登山報告書 ――

発　行　　1999年６月20日
発行人　　ＨＡＪニンチンカンサ峰登山隊1997年
編集人　　天城敞彦、森達弥
発行所　　日本ヒマラヤ協会（ＨＡＪ）
〒170-0013 東京都豊島区東池袋４-２-７
萬栄ビル501号
03-3988-8474
振替　00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」